自娯老録

二

昭和七年二月上浣起筆

特別
イ4
1919
438

四日ノ山ノ宮ヲ記紀ノ本拠ト傳ヘル

38- 9224

176703

自娛叢録 二

昭和七年二月上浣起草

○四月上旬大隈氏薨後十年遂墓谷の折分布を要する紀氏録、文書も氏の氏薨に関係あるが、一應目を通して多数の加筆をなす。光要が有るかもしれぬ。一月以来系統の系統を見出の従来曖昧なる点、氏の業績性格に就て、諸家の往復文書を見ると、漸やく ハッキリしてことが少くない。大体を於て氏の光を蔽ひ発するものが多く、氏が強き

藩閥政治家の間に介在して、始終壓迫を受けたもの
らしい。百端の経綸に當り、保守政治家の猜疑に苦
しめられ自信を行ふに勇氣があつたが、侯を排擠
するものは常にあつても内容に缺き難い人物である
から、排擠が出来なかつたのであらう。綱の實情がよく知
れる侯の最初木戸に責はれたが、木戸の洋行よ
り帰朝後は寧ろ大久保に責はれて、遂に木戸に
忌まれた其の間の消息は此書に依つて大いに明か
にするを得た。侯は財務内務を一手に掌握し
てゐたのは、経綸の力のあつた一證であるが、之が為
めに嫉視するものがあつたのも無理はない。守舊派
の親方島津久光が、侯を忌み侯を斥けんとした
も侯は聴かず、却つて島津に直談して其手を屈し
た其の當時さつも頗る令名をとることを得た。侯の行動
に就て種々なる中傷が起り、侯は私利を営み公職
を冒涜するものだとの言ひがけを受けたが、財務
内務を一手に掌握するの関係から起るべき誤解
であるの然るに文書に就て見るに、大隈にある五代
友厚が空相場をやつて、侯から戒飭を受けた
こと、之に就ても論難をしてゐる種々の書簡に
依つて見ると、侯の為めに冤を雪ぐに足るもの
がある。十四年政変に就ては、小野梓の自筆日誌
論客當日誌、之は全の珠玉に価するものである
が、之に依つて一二の秘密を知り得たことは、政変

後藤氏政府の大陸侵略を恐れて内勅を奏請したことが
あらわれて来た。それはさきと極めて簡単に考えるべき
が、特にそれは「ロシヤ」の国勢「敬義」主義
の退嬰後政策樹立に伴ってあらしめ「ロシヤ」及び
擬する米国公使を以てしたのと「ロシヤ」の座しろうつ
たことも記されてあるのをんと就て思い合いさるべきの
佐幕者民が長く洋行りを動めたのを矢張り敬義
主義から来た度手ぢかあつたと思われ板垣の
北の度手の羅つたが長い流れた之んを捨てた
らん等のことは良のかたを多海を乗ると就て
始めて知る和てある。
二月一日記
日曜日に乗ってトルコ教果文の書と立寄の図

書を送り得る所左のごとし
清人胡兆祥手記支用一冊
これを評本二冊深くもつ清人胡兆祥の
事和三年長崎海来の人を醫業
とし善を以ってメミく市海米竜
も手のもの花を以ってメミく市海米竜
書長時奉行兆祥の時師事しとうとう北
得るものと志概意と称しあり清文
い通訳のもの「ロシヤ」一は支那音を
附し一は和解也
花鳥春秋
張湘山来の心を名文ちんを文筆と

著者を知めるものとも覚のものもあるべし
こんハ活字本にも二枚を一冊にしたるあ
也恐らくは丁数の多き方の誤の一例
なるべし、余の此文を愛し、嚴花に先君の自
写本あり

田戒河巻　一冊

此書浮世家名備の著述にも著者の名詳
かならず但此断回久成の自写本なるも
以つて然るべし　冒頭に云く、巻首に云く　辛卯八
月東京本市　以島田蕃根翁本謄写　湖
南心茶翁とあり、序の欄に「湖南
石鹿山崇福寺主久成志」とあり、巻尾

榛原製

時に廿四年八月廿一日燈下對校了　姓は同九
月一日午后六時畢　湖南杜多久成とあ
り、蓋し大本也、余久成を知らざるも
趣味の先輩也、久成晩年威する所あ
り寺に入る、此書ハ其の杜多時代を記念す
るものとなすべし

○前巻の末に録した頼山陽翁の與田鋼玲歌八首一
幅未だ縁めざるもの、南に乗じ書に掲げて玩賞
す、鈴の面白いのらせんの南朔の年號　與田と
あり而辛巳の干支を刻すとこの塗を刻る長七寸
樹紋なるもの南朔天子行幸不跡の土中なるもの

と頗る珍奇を尚ぶ、えて山陽を指て他日あるべきものとなす、山陽窮るに真と称賞ひのものとなすべしと、然るに世人一通の基礎段を減ず、蓋し山陽の史実を編纂と詩集を検し、弱比ち或は或の異同あるも知んぬ、未だ審検の暇あらざる也、惜哉、人村瀬氏の極めて尚慎密なる者も材識豪邁なる

先の真跡無怪観者以此等屏撮、則

他度相一変可離也

辛酉未夏六月つ生村瀬泰一識呂

恬皆の頃仕も暇に因り表装も敷るに第も杉紙

粗朴の窓切のそうぶの味を見れば、平山生主人

榛原製

元号なるもの今不況の時代五十四

を減殺せんと、余心不豫と雖ども、遂に未だ嬉ばず、遂に

を公拓ちきうを動く、早晩余が筆中の物ならん

歟

一月二日記

○前略男爵の生涯、神を建て碑を建て紀念碑を

設し、勢力一代故田増吉郎氏の

横巻と誌し、なるべく、碑文書を一玩

の二字を題せ、碑文を作る、余時時流芳

也、又青面帖二冊を

清代の四字を題す、清代前時代の雅号を北

青面帖は家の著書を集めるが為也、早大の法

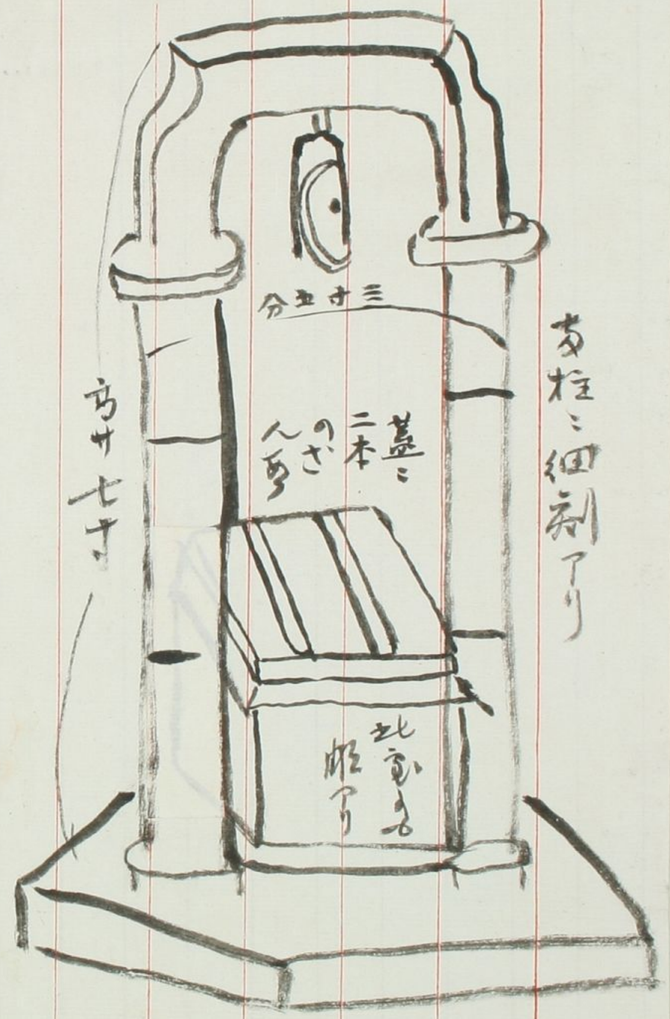
芳都氏寺尾元彦翁先宅に掛くる拙毫を待ち、
予「成子不説」の四字を書して呈する云く「剣気吐虹」時事を感ずる不
あるも也、去征軍人慰問の為拙毫を待ち人あり、予
即ち富樫英遠の四字を書して與へる。いつもや淮
んやらの雷ミ声（漫画）の為「馬」の額面轉
くして海前の大井山岳殺敵の千の岩石、余の詩
意を問く来る、北海孫集に在り又家者池大雅
自刻の印あり、然んも之れを解するものを未だ知
らず、此くて「人間善を為す塞翁の馬」と曰ふ義なり、
予之れを以て答へ、兎角孫集いまともに解し難く
往々誤の類するものあり。

榛原製

○余紙筆材屋の文房を過り、輸入品のインク、スタンドを得た。
ドを多く捨てて一個今のインク、スタンドを得た。
体裁知れず木彫にて左の粗図のごとく、アーチ形の内部
のつるべ鶴り、あ柱の麻末を彫刻あり、井の砂
子器を紫宜して墨汁皿の器の充つ蓋の二本
のさんあり、体日制我井に似たり。余多く洋式の
墨壺を蒐めたれど、本上の壺くらゐ此器も
珍味あり、近来洋物の珍味あるもの漸やく来る、
過るもハンガリー産のかぶ、デのパートの出陳さんとか、
程々おもしろいものを見受けたり、貴のあめらし
かの初日の午後の大方雨ふれて、余の旅しがり
しの大徒壺約酒の礼をめくけあり。

松平定信公像

文政四年作（酒井雨岳氏蔵）



模原制

○日柳燕石の石印二顆を京にて求めたり、材質粗く、但し廣物にして價高き石猿にて、燕石潤筆の傷徒の頭顱なるを以て

帝國圖書館藏

橋原製

なるべし、仕使なく人を遣はして高杉東行堂と燕石の家と隣なる戊辰の役に流弾の祟りしも知れず、紙幅と殺す、

（後日北印余の筆中に帰す）

○余のふる蒐集は漸やく千點を八九拔いたり。二點或は數點（例へば芭蕉の書簡六通一點のものを、個々に算すれば、とうに千點を越してゐるが、一組を一點と數へると、やっと千點位。）

北の蒐集を思ひ立つたのは明和二年の冬であるから約四十年かゝつて千點（に達）したのである。初めは玩具の蒐集を主とし、次に、飾りの美しいものばかりを、骨董趣味を主としたのである。

しいのとで、方針を立て、ふる骨董を重き採ることにした。

殊に外國のものを成るべく得たいとつとめたが、うまく手を入らない。日々の教育に多く見られる。

董のみと云ふ所があつて、北方から移るのを買つたが、

美が多く百點ばかりもあるだらう。

人から寄せられた

七多くあるが、外国向けの人から頼まれたこの種とすべきものがある。無用のものと実のを集めればやはりこの位が畳
莫とすること、ちょうやすく手を入らぬ、一千粒の米合位
を蒔しても平均一粒二三回は拂つてみるもあらう。前年
背莫を買ひあつめた拂の残物などは多く此の都数
を入れたのだ、その中には可なり高價のものがある、銀英が
五六十粒もあり、仏像も三四十粒はあるが、これ等の中
より相当の價のあることがあるから特選して駄物を去
つたら[illegible]忘るものとなるけれども、まだ多
吸かるべし。少花の玉蜀黍の附け込んだ花。折り出は拂ひ得たるものと梗概も拂
してある。千と云ふ数は左程の大数でもないが、自実

榛原製

際を拂て見て達する時のを要するものもあるが、前年
豆本千種を実のを集めた時も可なり骨が折れた、意
に従ふ数を食る評をもって挙して集め得るものあるが
が、意のものもあるが、冬雨降り上げるのとなるを無駄なる
評を要するが、例と目録
て一千粒に達したことを知り、所謂数と数を採
集の一段落を告げた。今後若し得る所があれば
これは駄物の代りの埋合とするべきだ。　二月三日記
○閑に乗じて演劇場物語列り、近くウインター
嬢の演劇美術用品の陳列を見る、こんは五六年の
蔵月を要し苑集をこんなる劇の古図十二枚ミラ
五十五個の大板物ならびに下部ならびに此の場物銀のお

る未だ何んなものかは、この方、彼の之んが考めるさ千円位を要し居り。因に大小さまざまなる行
さの同者の多くあるものならし。掘つて複雑なる陶器類を集
外系統之に属するものなるべう、特殊の研究家等は勿論
の材料もあるべんが一般の観光者に注目を惹かざる
べう、保し剣を造つとする也彼等に一本鉄き難きあ
べう、未だ彼の序を他の陶列品をもつて、なほ興味を
覚へざるは驚を発するの行程を小模型として示して
るものなる所の事の手数の掛ることを知り得
べう、外人が未だ彼を持ち無味を以つて熟視するとい
ふものあるべし。尚ほ他の支那の剣に関するさきく
の小模型と絵書とが多く陳列されてある行程の

榛原製

人物を拾ひ出すとする寸許の模型の場面
の姿態と傷るものも一見奇抜味を覚ふ。尚ほ因
しいものを描写した、その中も多数の出てゐるが、
の模型の出陳されてゐるとは思はれ
ない。

二月三日記

○因に日本の琳琅閣を訪ねて因者を過る僅
かに一二を得たり、一は宮内を「鑄山秘録」者名は優
る金が命する本書、此書は人の著述をもらさんも
此書の書物の中まで知る事を得たるものなるべし。元来鑄山の秘
密の場所を稽古の迷信あり行者の因縁あり、と
いふものも尚ほ研究し居るもの少からず

此書ハ今日の鑄業ニ於テモ参考ニ資シ得ベシ、他ノ写本ハ「風流使者記」トシテ、寛永年間川瀬高主ガ甲州ニ移サレ、相徒田中省吾ノ家人命ヲ奉ジテ其主ノ風教ヲ探捨シ写セシモノニ、徒集中ノ峡中紀ノト同一ノモノカト思ヒシレ、然ルニ其ニ同ジ時徒田ノ紀ノモ文章全ク異ニシテ北者ニ百人唱和ノ詩アリ、徒徒ノ峡中紀ノモノハ一七絶ナリ、思フニ北者ニハ百人復命ノ紀ノ紀行ト見ベシ、恐ラク川瀬家ニ蔵スル原本ヲ勝家ニ写シタルモノカラン、巻尾ニ左ノ数行ノ文字アリ

右風流使者記、通計二十一本、先臣曾祖茂叩上

榛原製

先君保山公、冊子真蹟
文化丁丑季夏、郡山記室臣相維則奉表公
命軒首秘写焉（一本巻末ニ有此識語）

外ニ拓本ノ帖子ト云フモノニ二ヲ得、一ハ朝鮮ノ僧侶相重修ノ碑ニシテ古拓ニ北僧文禄ノ後カ最清正ニ与シテ屋セシモノ、人物ニ蔵スル北僧ノ集アリ、他ノ一ハ小田原行長ノ碑ノ拓本ニシテ家老ト衛尉ノモノアリ、左拓ハ

二月三日記

松雲大師の碑帖を展べて静ニ閲ス、首ハ
有明朝鮮ニ出陣表忠祠松雲大師碑
並碑銘并序

と云ふ、松雲の為め表忠祠を建てることゝなり
此碑の文祿の役の活躍し給ひし碑中の首部なり
り左の如し、冒頭に云く
奥我昭敬大王在宥之二十五年日本賊大発兵入寇
主上鄙在西陸凶鋒弥満八路中外食焉者多雖免
逃賊逐肆意蹂躪維時松雲大師推政佛者流也
形銃入高城渝城少嘗殺賊見其儀容凜然即起
敬礼其徒由是嶺東九郡得免屠戮之慘、
後世入寺洞山曰渝之文に云く
上嘉歎進階堂上使陪劉綜岳縱入倭營渝意清
正三往三返盡得要領正問朝鮮有寶乎曰無有
寶在日本若欲是也正色泣之、

此碑後に四書を奉して日本に来る事に云く
甲辰春四書往日本渝隆相廟敬掉受約束推謹
還被虜男婦三千餘口云
此碑紫禁被皇後再至成十月立 李宜顯撰文 金鎮南
書とあり
○古書畫や古文書や古書冊などを必ず保護
すべきやハ、今研究されつゝあるも(まだ)南の方法が二流さん
い。若しハ珍寶と云くハ門外の不出び絶對の秘にかゝ大氣
のさらされなり、大陽も眼さへ、こゝもろくに。殆んど秘
さんと土蔵の湿氣を受けて損傷を生ずることもあつた
の相違るのが大体まゝ保護されたとしてもまだ。今日のや
うな何もかも公開を表こゝのやうなうるさい美術品の為めに

可なり長量を要する。従前花瓶〻秘められし悩殺るが
今盛んに陳列の為め傳り出される。是がうスの彩を容ら
れ、無邪に作りたい張度も空氣の熱してある所を置か
れる。兎もすると一ヶ月位も腐蝕の用を供さえる。是が果し
て器物の実を無くさいと云ひ難きあり。彩色のある表
色を生じめ、ひあるか、異物の盛り上げ彫を生ず
ることの無きか、無雜心なる表かい貴重品もタマ〻入
りをさやる異変があると云ひ難も適合危険のもの
ある。大震災前帝室博物館がうス器の入八十数年
十帝を出したあつた古遠去祥天と似たるが美術を誤
る為さんもあるか、西木板出の誤るのを笑へん、もとい彩色
も同じ様なるべきうに、倚物館の入者の七さらけ出して

標原製

ある者の見通くるやうな新色が変化したと云ふてゐた。
兎角がうスは動もすれば温氣を除し光線を何かの化学
を為すと云へくも、がうスは保護用として結果かるべ。
或る実験家の説によると、がうスは熱を稀〻ものを露出し
て〻と変を受ける器いあるが、左ある変色を来すこ
と云ふと云ふのは、こんも一説ある。冬期の陳列するビ
ルデングもがうスステームが通つてゐるうち、陳列品の時
の熱を受ける、いつ動やや自人が陳列したるの戻つ
て来た、品こそを觸れもえうと、熱氣の為所ゝてゐるを
認め以ひ伝ひある。物の熱化を置き美を冷化に移す結
果として伸縮作用から盛り上げの傷の異るが彫刻
することい理論上南氏と云ふべきうである。さうきに日

本の宝玉類い乾燥を防ぎ其つ氣温い一の高度田とそ
変更するこんな對し門外出の品を保護するとしても大
る用意を必要とするが、過激の熱氣の觸れしめ
ざる迄うま氣温の異つた所へ置くとい、どうもよくても
危険とかの伴かるもの。日本は黄金の書画を保護す
るの桐箱の形が経験上よいとなるとみる。乾燥の
国土なる箱を忘れて拵を密出のる法が無雑とこれ
国者なるい躁かるとて繋上する列するが例えば、日本のやう
温氣のある国土でい、気を樓ることい考ひるもあ
ること漸次く氣がつくの列つた。国者なるも置所る位
つて始る変化のある書しい例い、奥田義次郎が五千
円を拵ひて購ひ入れた古浄瑠璃でい、保存からか

標原製

つたので新ら本の出くたあるのに数乱して社会日の輪ゥ
しに日根日程の大浄瑠璃を把つて比較すると雲泥
意ゥるめ、差がある。兎角貴重のものは何ゥ宝ゥ
大ゥる注意をかく防かるるめ、文献に出すことが何等
りも危険である。あかし寶も続ゥる死蔵するか防ひる
るいから、自分い此物を主張
する。今日の如く複製の必要を主張
しもるに間も合の世が清ひことかるい、特殊研究家
びるい限り、原本を必ずしも示す必要いるい、其
を亂るるの複本るるば危険る文句い無い筈で
ある

二月四日記

○今日文り書を通り書畫二點を得、

歌書抜粋

一幅

和歌に云く

とろん数ゆ[illegible]かぬ子の和の[illegible]

玖[illegible]なる[illegible]とも[illegible]ん[illegible]世いたふ[illegible]古保

十八枚を一帖に収めたるを[illegible]ふ四十出を[illegible]次の後

名人の一[illegible]大震災前に歿す。今一二首を掲載

す

東寺にて

[illegible]の[illegible]春[illegible]大寺[illegible]

山[illegible]の雪のいまさめのこと[illegible]

横原制

加藤[illegible]

[illegible]人[illegible]もこ[illegible]えをもる

宝こ[illegible]ちよき[illegible]の[illegible]

○若しの等考巻記[illegible]れ絵を交く[illegible]あんど

その絵の僅[illegible]ん[illegible]数[illegible]きんあるが[illegible]ん、第[illegible]

一[illegible]毎に絵を[illegible]ら絵を[illegible]ることく[illegible]向

し[illegible]第[illegible]絵を[illegible]、絵を考師[illegible]第[illegible]の[illegible]

を釣[illegible]ん[illegible]版[illegible]絵[illegible]流行の[illegible]

の反映[illegible]ん[illegible]、寛政七年[illegible]仙[illegible]の[illegible]山[illegible]

[illegible]す[illegible]絵[illegible]大[illegible]錦[illegible]考[illegible]三冊[illegible]

八[illegible]考術を収[illegible]、他の二冊[illegible]紙の絵[illegible]

[illegible]第数[illegible]、余[illegible]を比考を[illegible]、絵の格[illegible]

なてこゝろ、第二十八回をば、鶴の恩返し、
赤ゑんてを加へ柳髪を加へ、ことに白紙の露
おくくつもりくて七寸五分三厘五毛一寸
達のすハ三夜一夜巻（附録美術の巻 元道三九十九ページ）
いく夜、一寸達のこと或方なるべし

一例として偉くこゝを掲ぐ

二月四日記

○今日白木屋呉服店デパートの横長と郵便に関する展覧会のあるので一寸覗へて見ると、各時代の
はがき、絵ぞうき印紙ずさまくの物が陳列さ
てゐる。なほ数の附いたのハ家義と深山もるへが
郵便に関するものが若干ある。之等の絵画物
ゆゆすべきものを考へて見ること、前時代の奇紙

榛原製

鈴と字の附すること若しくハ考へ。そんハどんな
ものゝことゝ、長い間保存と絵ぞうきハ皆
アルバムに入れて大小百冊ある。中にハ外国
の物、数千年を経てゐるから、絵ぞうきの変
遷を知る去物　とも言ひあらう。家義と郵便
関係のおの物の豊富なるハ此んびある。昔つて手
紙と風味を感じて折絵でん切を集めたことが
あるこれも若しの絵ぞうきの物なるべし尚お猶
も一冊ありある。郵便印紙に変る種ながら
集めたことあるが、之ハ今失つたが、世界各国
の印紙一冊直に手に入つたものがある。
若し旅行の時に用意して行くもの

北方野と記念碑を建て印刷して一部諸社の帳面が
数冊保存されてゐる、この碑は駅傍（駅傍）に建設ある
事は赤関所を通（行する折の）印鑑第一関
所証文も実許かあり、先觸状ともあるが皆郵便
駅逓掛扱すべきものである、尚ほ郵便
開始実年かの紀念碑外四人に賜る為めに
給入の扇子も二箱ある筈、北海のもの設今は
印しても唐の扇子扱りのんるものであるが、駅（南）場
扱に置けば南条氏とするものであるから或
る機会に寄贈することが尤も上策と云へば
まことを書きつけておく。

二月廿日記

追書き漏らしたものある、文義がある、これは今不用の

複原製

まのが、これも書状に附属のものである。なり記な
どもさまくあるが、パノラマ式に各道の名野を
書いたものもあるが、（之）るべきに、北海の旅のみ
ものも役立ちあらう。これも家義と相同ある。千
社参りの札も矢張り北部類に属すべきあら
う、尚ほ考へらるべきものあるかもしれぬ。
○北海の日々海岸実況の原形を概説したものがある
附録に掲載した、これは○大隈侯と西郷隆盛とを
項下に、西郷が人に与へたものを侯は読者を
する人び其の言葉ことは一向アテにならぬ、よく注意
せよと云ふ様なことが書かれたものである、侯の果して
読者を兼ねたか、侯の言説は果してアテにならぬ

と云ふことである。
維新当初侯が義勇張り度き活躍した頃は吾等は指し
て居らぬいから、其頃の言説は想像も出来ぬが、晩年と
迚つて徒に家に無つたことは春嶽侯が面白い頃に
もそうだが吾等のこんまでの考像は其頃は言説は直載に
八キ〳〵と無遠慮の言を吐かるつたと思ふるしおる侯の
の考像もつかるぬ。侯う国藩の人さるるこれのは晩年に言
論る的確のあつたのも晩年かある。若い時代は不侯を
掠る所るる一回の論でも、曖昧な言を吐かず言を二
三るるうと、春嶽あの人が別邸の人にけんそう
想いせるのだが、西郷氏の手紙を云るるのは果して侯
を斯る不侯らしいものあつたのであらうか。佐家の手紙

きい見へることであるから、一潮を奉けたのを以て全部を
評するものと為す譯にはゆかぬ、恐らく何うの折を
西郷の威偉を言ふことがあつて別に言ふのかもしれぬ
ぬ。然ることは推ることもあることである。全体大隈侯と西
郷とは性格も異なる。思潮も同じからず。政治と就ては
度は西郷を眼中の置いてゐる。世間では
西郷をひとく崇拝して大意動揺をなしたるが度は決し
てさうは思つてゐるようでない。新聞雑誌も就ても変
其の人があつたと云ふ位なことである。征韓論を主張
の事西郷が自家の死命を基人に迫きめと大隈侯は
又た言ふことのである。確と感情家であつたとも
(で、人を信ずれば過信するやうな人で、勝海舟とは不相

常に悔んでゐる。うちは黄色を誅戮する積りと云いた
西郷は続き説かんとして後の黄説を変じてゐる。現に自分
の有してゐる西郷の書簡に黄色誅戮を主張した
ゐる。斯る風情家が僅かに一片の書簡で大張戸
が言を二三のまとめたるものと言ひ、うちとこの
黄色を云り上げて、侯の言説のまむきを細
かに研究するも及ばざるの甚だしいやうなるか、筆の存する所。
不悉を書いて見るのも一興である。戸は維新の雄論を主つ
て一面の外交を責任家として保守頑冥の
力輪を当らんとする。マサカに西郷一方に泣め貴説を
お弟)さへ。黄色の言説を後にあつたあらう人を見て活
を説いたことをあつたとびあらうと意味せざるを得ない。自

分が早稲田の騒動を当のたれ沸き、大張戸は自分を云ふ
るに、君は外交の経験を心得ないから火の手に挙がるのに
と云ひたれ。こんな騒乱の端を自分の言説が西郷(西郷)き
たことを話さんとしたのに、今考へると高慢なことであるが、今考
へて見ることもあるも侯の話かを聞つて居るやうな思ひ、侯は宏
辯の人に、何か頼んで斯様な言ふ黄色と頼んだ
決して黄色のまうは言はん。早稲田大学の騒動
誘ひ、世界の大勢を説いたる教育の必要をも
感じて説かるけれども、所謂肩の寄附を頼むと云ふ逃
は一言誘を及ぶことが有るのに。勿論言ふの紙
つてゐるのは(ある)のが、心あるまうを感得しつ
いるのは不得要領と評する。尾崎行雄が書いたもの、

内務改造堂解散の時候の裁決を得んと、河田政銘
北条流房前島密の三氏袖が美の意見を別々に少
へて、先を堂に報告し此時は三人三様のことを言れ
とあるが、侯の意見は単簡でないことがこんなもてる。こ
んを以て見れば言を二三のすると考えるのは甚だ軽率
である。美の意見を理解するとは同しるべの頭脳
を有つことあるべきはずんが全般が理解さんるのみと言
ある方が安南であるのだ。美の頭脳は多くも極大で新会
が組織であるる任かせ人に新しく役切り形の流しも操
り返すことをしてるるのだ。殊に嘆かるの同しことを
言うあることを好まるるるから、毎日各地の新聞
表が美の説を微しく来ても、同じ事件の新しい抵

標京製

抵別の事を語られた。おしく頭脳の豊富を術つた氣
味が無いでもないが、決してその説は凡でないつた。
美が二枚舌を考えるのは誤解であるることが
あるが、事を二三のまるのであるいことは確かである、二月
六日記

○昨夜は市と住先の出張女史の体ある在うした新宿の武蔵館
の映画を見る、トレーダー、ホルンなる言葉の映画を
観り、二時間飽き亜米利加の天地の拡り、新しく開発
野の大自然を味あることを得た。原野に牧畜の新鮮をもて
走り、沉湖に鱒鮭躍る。猛獣あきらる衝突して弱肉
強食目のあたりく現はん、怒吼悲鳴はトーキーを耳を入
り来る。時に表社の状をあらはし、歌舞音楽はトーキー

PROGRAM

A WEEK FROM
FEB. 5TH 1932

— 1 —

A Metro-Goldwyn-Mayor Talkie

"REDUCING"

Marie Truffle ..... *Merie Dressler*
Polly Rochay ..... *Polly Moran*
Vivian Truffle ..... *Anita Page*
Jonnie Beasley ..... *Buster Collier, Jr.*
Elmer Truffle ..... *Lucien Nittlefield*
Joyce Rochay ..... *Sally Eilers*

Directed by Chorles F. Riesner.

— 2 —

A Metro-Goldwyn-Mayor Talkie

"TRADER HORN"

Players: Harry Karey Edwina Booth
Olive Golden Duncan Renaldo

Directed by W.S. Van Dike

・上映順序・

（二月五日より
二月十一日まで）

本興行に限り
十二日、祭午前九時半
不日十二時半開館

メトロ全發聲
一、花嫁選手權

メトロ全發聲
二、トレイダホーン

説明部 徳川夢聲
牧野周一
丸山章治

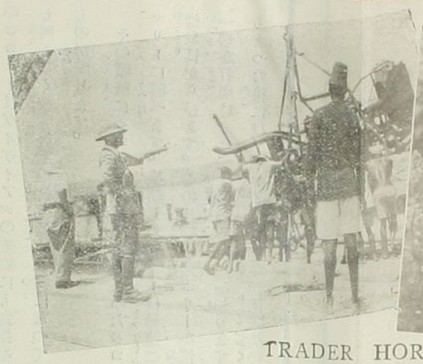
獨立聯盟映畫サーキット

武藏野館

電話四谷（〇二〇六）
（一四二一）

○土曜日午前十時より十二時までに
煙入場の方は各等小兒料金

の後を追ふ。二人の白人婦人に捕はれ、禁閉に處せ
られ漸く解放を得る所ある、猛獣と闘ふ危険の迫る
所ある、白人の母婦人母子（ハ蛮社の女神と崇められ、母と
共に崇められ）と共に全中部アフリカ、驚く。猛獣跋扈の
天地に蛮人の危険ある、親者をも始終汗を拭く
しきりなり、白人の女神と崇められる奥の男子とも
蛮社を脱す、蛮人の追撃する有り猛獣の迫り侵す
あり、二男一女獣俗を通つて奮戦、僅に身を免る、北の映
画の美公ホルンは美花の人を出うとせ十九才を殺し、北
映画の故向ホルンの体験を採つたものなり。北の撮影
ハ初めての試みなる撮影隊携帯の為抱ハ十帙を通し
猛獣を乱しても活躍の武器のあつたことを言ふまでもなく



*スナップ・ショットは録音機運搬を指揮するヴァン・ダイン（左から二人目）

原作 セエルリル・ダリル
脚色 ヤーケス・ドーヤチリ
撮影 ズイル・ンベ

監督 W・S・ヴァン・ダイク
撮影 ナンイヴ・デ・ドイラク
同 ルグーノ・ヂーヨジ

TRADER HORN

トレイダホーン

梗概

未開のアフリカの奥深く侵入して、豪膽にも土人を相手に行商して歩く白人アロインス・ホーン、同行したのは舊友の息ベルーです。河に沿ふて奥地へ――無數の巨獸が彼等を脅かしては去りました、

途上、圖らずも白人の女と會合します。廿年前土人の襲撃を受けて夫と幼い娘を見失つた宣教師の妻でした。其後風の便りに、娘は成長してソルギ部落の女神と崇められてゐると聞いて、これから會ひに行くと云ふ處でした。イソルギ族！それは最も殺伐な人種でした。ホーンはその無謀をさとしましたが女は同行を斷つて獨りで出發します、間もなく、ホーン達も或る瀑布の下に漂着した彼女の死骸を發見して暗然とした事でした。

其後、一行はイソルギ部落に到着したが、忽ち土人達に捕えられ、慘忍な拷問に會はうとした時、この部落の女神ニーナが現はれます。白人への好奇心と、彼等の悲壯な態度への感動がニーナを動かして、捕はれ人とゝもに彼女も部落を逃がれ去ります。

憤り立つた土人達は山河を踏破してこれを追擊します野獸の土人の毒手を避けつゝ、ホーンは無事逃れましたが、哀れ從者のレンチエロは投槍の的となつて斃れます

ホーンと別れ〳〵になつたニーナとベルーも、九死に一生を得て、三人の巡り合ふ日が來ました。

ホーンとベルーは何時しかニーナを戀してゐましたが今ホーンは靜かに悟り得たのです「愛は若者の上に惠まるべきだ」と。都會へ歸る若い二人を見送つたホーンは彼等の勸めを寂しく拒んで別れます。ホーンは又暗黑アフリカの奥地深く分け入るのでした。

出演者

ホーン……ルーリケ・ーリハ　ベルー……ドルナレ・シカンダ
ニーナ……ルーム・オ・アチユミ　ロエチンレ
レンチエロ……ルーム・ナキウドエ

・トレイダホーンについて・

トレイダホーン……これは映畫史の上に燦然たる金字塔、映畫だけが描き得る驚異の世界です。これは、英國人アルフレッド・アロイシス・ホーンの體驗談を南阿の女流作家エセルリダ・ルイズが單行本にしたものに基いて映畫化されたものです。ホーン氏は昨一九三一年六月、七十九歳の高齢で病歿しましたが、その一生は殆んどアフリカで費されたと云つていいさうです。

監督、俳優その他數十名からなる撮影隊は悉々ハリウッドから、アフリカの心臟ウガンダ、ベルジアン・コンゴに侵入しました。この文明不可侵國まで侵入したのはこの行を以て最初とするのです。携帶品はトーキー撮影機など約八十噸の大荷物でこの他に猛獸の來襲に備へてガス銃が持込まれました。

言葉は各部落で違ひますが、スワヒリ族の言葉が最も廣範圍に使用されて居ります。で、劇中ブースが語るのはこのスワヒリ語なのです。

エドウキナ・ブースの出演映畫は、この映畫以前「マンハッタン・カクテル」などがあり、ハリー・ケリーは一昔、ユニヴァーサルの活劇などで思ひ出懷しいものがあり、ヴァン・ダイクは「南海の白影」などが既に彼の名を一般的にしてゐるやうで、目下水泳のワイズミユーラーを主役に「ターザン」を撮影中、何しろジャングル映畫監督としては第一人者です。

の日支の戦争は満蒙に端を発して終に遂に震上海に及び
ビンに迄及んで未だ日々の戦報を聞きもたらす度び
ごとに、支那は愈々頑強を加へ、日本もまたうく苦戦の模
子である。彼等は、いつまでも続くるものと思ふ、高
き将士を多く捨てもある。恐らく今日の戦争程日
本としてやりきれない戦争は無いであらう。上海は云
ふまでもなく世界共通の都市ともいふべき所で各国
の租界が交錯してゐる。満蒙事変以来動もす
れば日本の難癖をつけんとする列国の目前を兵
を交へ、砲を交へるあらずとも他の租界を侵し勝ち
所が即ち戦場である。支那軍が列国の氣色をす
るのけれども生やさしいことでない。日露戦争

を巻き起さんとした支那軍を破り、支那軍は遂に
けなくなる敵は強大軍を捨てもある。支那軍
数に於て比較にならぬ寡兵であるが、国際上の制
約から矢鱈に増兵の出来ない事情がある。彼等
は大軍を相手にするやうな元行機関銃爆撃等の
慶金教敢て難くいるが、爆撃も自由にならず
不利がある。彼等は市街戦に出するやうな、彼等は
日も休まず高き構をこしらへ、人家の壁板や家根を
隠れて弾丸を打ちをる。日本は全体市街戦
は慣れて居らぬ上に、支那軍のことごとく卑怯な戦
を弄する。日本軍は安南の投害の多いのは市街
戦の敵撃するよりと云はれてゐる。時は今聯合の

現ることを期待する。軍備全廃の幕も既に開けもする。その目前に国際関係を厳重にして戦争のないから、日本の雄飛に容易なことだとは。国際聯盟の要旨はなるほどそのとおりだ。光栄数年を経ても未だ解決しないものもあるが、やり悪くい軍をさせるのが寧ろその本旨であるから、日本軍の困しむのも當然だ、日本の如き北味を今なお感じたのもあるが。強く今なお全く捨ても固し味がつき絶えることもあろう。日本は受き犠牲を払ふも、その得る所は北の苦味の体験に過きないと思ふと、衣帯は長大息を禁じ得ない。

二月七日記

○小品の芭蕉既に前に述べた芭蕉の情勢当時各

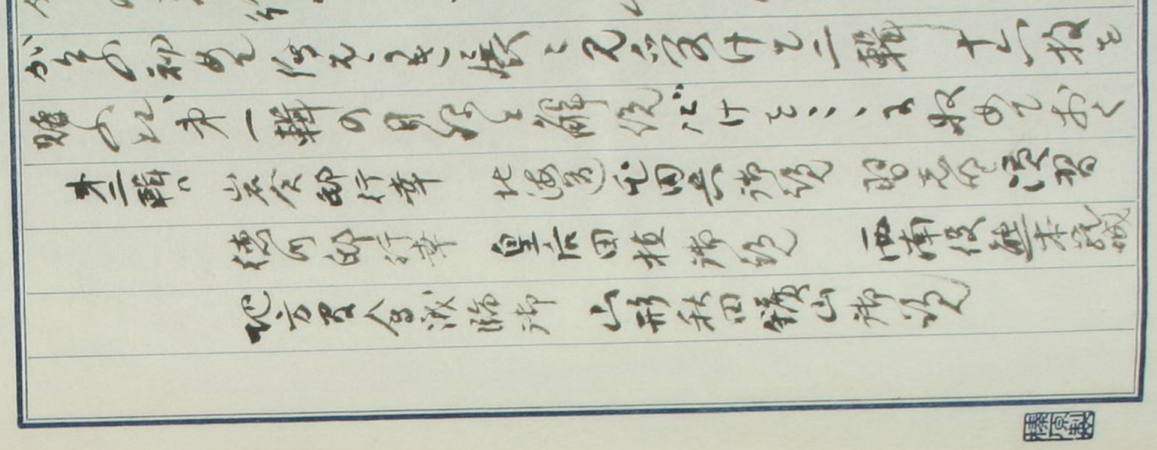
榛原製

地果中一往々指を深むべきものあり。一小骨董店に入りて偶然心の小品彫面笑と女音双を見る。今指動いて愛蔵す。婦人北人彫刻なれども二三年前北人の作る結び一個を得小品架中の者、これも彫面二個を抱き合せた彫りものなれど甚だ風格を西洋でいうから得がたき一寸許のものなれど俗古の味を掬まし、殊さらに大作北種のもの根付としても作られあるが例るべきこれは小さいながら面白きものとして作られ背景の舞台襖を擬したる金地に松を画いたるものを嵌めたる歌舞伎、桐彩色も京仏者の銀箔、紫中の孫とあるを見る。外に西蕉の支那人形を婦の、茶襖もものクス

りを施し行ふものなれ交証をもとめあらんが為なり。
（二月七日記）

○明治神宮の聖徳記念館の壁画の内流大事御一
代の偉業を図する一行を誇るべき諸藩の献納を
俟る当代著名の画家の業を成るものなるが何れ
かうんまむ絵をもとめ奉ることなるべし
かなの初めを伺ひそめ長と見受けて二輯十六枚を
賜ふ比、第一輯の月を解説だけをこゝに収めておく

第二輯の　岩谷邸行幸　北海道　元田侍従　習志野演習
徳川邸行幸　皇后田植御覧　西南役戦本城
地方巡幸　静岡御臨御　山形秋田鉱山御視察



聖德紀念繪畫館（表紙寫眞）

明治大帝並に昭憲皇太后を紀念する聖德紀念繪畫館は明治神宮外苑青山葬場殿趾の前面に位置し、建物は單層にして總建坪は主階繪畫室に於て約六百八十坪、地階事務室其他に於て約七百五十坪、東西約六十三間、中央南北約十九間、中央最高百尺に及んで居る。

繪畫室は其內法坪三百七十四坪、繪畫を掲げ得べき壁面の延長約八百尺に達して居る。構造は花崗石積鐵筋コンクリートであつて採光設備を施したる耐震耐火の建物で、殊に繪畫室は外壁と內壁との間に充分の通風裝置を爲し、濕潤を防ぎ室內は電氣暖房の裝置を施す等、全く最新理想的の建造物である。大正六年三月起工途中再度延期中止して大正十五年三月漸く其の完成を見たものである。

第一輯目次及解說

立親王宣下

三菱合資會社奉獻
橋本永邦畫伯謹寫

明治大帝は嘉永五年九月二十二日御降誕あらせられ萬延元年七月十日御年九歲にて儲君とならせ給ひ、同年九月廿八日立親王宣下の儀を行はせられた。此時御名を睦仁と賜ふ。（本圖中右より大納言二條齊敬、久我通久、正親町實愛、三條西、京極、橋本の諸公卿、前而宣旨を讀むは奉行葉屋長順と清閑寺中納言である。

踐祚

侯爵　池田宣政氏奉獻
川崎小虎畫伯謹寫

慶應二年十二月二十五日孝明天皇崩御遊ばさるるや皇太子にましましたる明治大帝は直ちに御踐祚ありて二十九日御父帝の崩御御發表あり、而して翌年正月九日清涼殿に出御ありて三種の神器を受けさせ給ひ更めて御踐祚の式を擧けさせ給ひて第百二十二代の帝位に卽かせ給ふたのであつた。斯て其年三月朔日より同月十八日迄御踐祚御披露始を紫宸殿にて行はせられた。

王政復古

侯爵　松平康莊氏奉獻
島田曇仙畫伯謹寫

明治大帝は國步艱難の際に於て御踐祚あらせられ。幕府は內憂外患頻々として迫り其威信全く地に墜ち四圍の情勢日に非なるに鑑み德川慶喜は慶應二年十月十四日大政を奉還した、茲に於て豫てより謀臣志士等と劃策中であつた岩倉具視は同十二月九日參朝し中御門、中山、正親町と共に聖上に拜謁し、斯て王政復古の大號令は渙發されたのであつた。（壁畫は復古の號令發布の前夜宮中小御所に於ける會議の光景である）。

御元服

公爵　近衛文麿氏奉獻
伊東紅雲畫伯謹寫

明治大帝は明治元年正月十五日御元服の式を行はせ給ふた。當日加冠の役は伏見一品邦家親王、御理髮の役は正親町大納言實德、能冠の役は甘露寺藏人頭勝長、外に攝籙一條家諸大夫入江則義參勤した。此日大帝は闕腋の御袍を召され御下襲は小葵、御袴は窠に霰御單衣は紅を召され、紫宸殿上の御帳臺に出御あらせられた。

大總督熾仁親王京都進發

侯爵　蜂須賀正韶氏奉獻
高取雅成畫伯謹寫

伏見、鳥羽の戰に敗れたる德川慶喜は大阪より海路江戶に歸り上野寬永寺に閑居し謝罪狀を朝廷に上つて恭順の意を表した。朝廷にては慶喜の罪を鳴らし明治元年正月七日之れが征討の大號令を頒布し公卿諸侯の去就を決せしめ東海、東山、北陸三道の鎭撫總督を任命し三道官軍出發し次て二月九日に至て有栖川宮熾仁親王を征東大總督に拜し、熾仁親王は同月十五日京都を御進發あらせられた。

五箇條の御誓文

侯爵　山內豐景氏奉獻
乾　南陽畫伯謹寫

明治元年三月十四日大帝には紫宸殿に出御あらせられ、群臣を召し御ら天神地祇に誓はせ給ひて五箇條の御誓文を公布せられて不磨の國是を定めさせ給ふた。

一、廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スベシ
一、上下心ヲ一ニシ盛ニ經論ヲ行フベシ
一、官民一途庶民ニ至ルマデ各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス
一、舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クベシ
一、智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スベシ

農民收穫御覽

侯爵　德川義親氏奉獻
森村宣稻畫伯謹寫

明治元年九月廿日大帝には東京に行幸の爲め京都御所御發輦東海道御通輦の途次尾張國熱田八丁畷に於て鳳輦を駐めさせ給ひて親しく農民收穫の狀を御覽遊ばされ、終はらせられて後關係者一同に饅頭を御下賜になつた、此饅頭は熱田曾屬女町菓子商安右衛門の調進に係り、其遺族今尙御幸饅頭を製して此の光榮を紀念として居るのである。

琉球藩設置

首里市奉獻
山田眞山畫伯謹寫

琉球は慶長年間、島津氏之を征討して其附屬となりたるが明治維新の初に當り島津氏をして琉球を我領土たるべく說かしめられ琉球國王尙泰は之に服して明治五年七月正使及副使を我に遣して入貢し同九月十四日明治大帝は勅して尙泰を冊封して琉球藩主とし華族に列せしめ給ふた、後同藩は明治十二年四月廢して沖繩縣とたつた。

本圖は琉球藩使が那覇港出帆の光景である。

○所謂御料地或は皇室の財産と区別してあるが
皇室財産の事は就ては其の筋を見た。皇室の
御財産は今主流を定めるとあつても議会とは全く無
関係とは云つてもあるが、維新当初を考へると官
のものと皇室のものとを考へたやうな次第で、極めて
乱雑の状であつた。諸藩が奉還されたり人民の私
の財産が認められたりやうなどと云ふと、皇室の財
産が少くなつたことを推し移すのは自然であつた。
最初の氣が付いた主張したのは木戸であつた。
木戸は西洋の後会も知つてゐるので、日本も地の主意
政体とする豫備の詔勅が出たると共に早
く皇室の御財産を定めて置かるべき、議会が開

けば時々皇室の経費を議することあるべ
皇室の財産を設定せば
べき恐れ多いから、早く御財産を設定せば
べきと、木戸は考へた。主張した其の頃は大限は大義
常局にあつたから、勢ひ地の間甚だ調べ難く現
し大限は其方法を案じ山林の如き確乎たるものを御料
とすると可とし、御重要を設けようとした。然るに当時
国費が多端ひまる上に、西南戦争が起つたので大限義
は思ひもよらぬ先を行かれ、次二十年間を因
むつてやつと皇室が出来たのも已を得ぬ事情を因
ると謂ふ方がよろしい。当時皇室の財産を必要とする
理由を正しく考へたものもあつたが。動もすると皇室
の財産を国民の財産からも豊富にせざれば、皇室は国民

しか為けがするすると考へらるゝものがある、岩倉公などは此の
論者で、岩倉公は西洋の例を持ち出し、政治家の権力の
大小は財産の多寡に依ると云ひ、皇室の財産から陸
海軍費を支出するやうにしませねば、陸海軍を御
すことが出来ない。若し議会で陸海軍費を議せし
めることゝしたらんが、議会通過の論が起つた時は如何とも
することが出来ない」と云ふ不思議な論鋒であつた。
岩倉公などは帝室の御財産設定の賛成者ではあるが、賛
成の趣旨は違つて居た。そこになると、大隈侯は西南の
理由を附して居た。帝室の威厳を保つ為めに於ては
るの財産が無ければなりませぬ。帝室の御親族又は宮公を
保護丈の財産が無ければなりませぬ。尚ほ帝室は慈恵
の府でもあるから救恤を行はせらるゝ余裕があらねばなら
ぬ。文芸其他の奨励と賞典を施さるゝ余地が無くてはなら
ぬと。兎角議会の掣肘が無けれバ帝室ハ何も
出来ぬとあつては、帝室其の尊厳を保ち得ませぬ。木
戸公が早く着眼せられたのは流石に達識であつた。（二月八日記）

○コーヒーの国ブラジルは赤道直下であるから、さぞ暑いことと酷暑
人体に適しまいと想像され、アマゾン河は恐るべき猛獣が跳
梁する所とされ、恐怖の国として考へられて居たが、近年
多く実地を踏査して見ると、案外のことが多い。赤道直下
でも森林が多いので想像ほど暑くない。サンポール辺の
気候は東京の厳寒極暑の季節を除いた位の気候で
と云はれて居る。アマゾン河なども恐るべき魔処は絶無で

岳多いと云、天然が多いので、人間の住むのに生ぬ所である。面積の大なる割合に住民の稠密高く、日本国の住民の密度を以て計れば十三億の人口を容れ得る面積に僅に四千萬人さく岳多いと云、種々雑多の人種が雑居してゐる。五十三国の国籍で出来てゐる聖書があるそうである。全体ハラテン系の国民が多いので、感情性とゆし、一旦住まんがどこまでも信ずる。量を貴ぶ。紙文をもって、髪の毛一本抜きゐることが偽いうちへいルレとなってゐる。如何も恢漢の性質で容易に交際が出来る。他今ノンキで流しがケトこと入つてくると、他かを譲ることが必ずぶんのが例である。汽車の車掌が汽笛とどこかも停車して人を欲し、車や人をもって止めを待ってゐるとノンキの一端

横原製

である。路地の日を見ることも一線さく世界を見ることを思ってゐるから、千銭ばかりを出す、どこかの国の国籍がある。北国いろ資産を示すことく二十一国から成つてゐる、旗章の中央を帯がある赤道を現はすのが、第一の秩序と直ぐの二字が書かれてあり、第二帯の上部の星が一つ下る二十の星のあるのハ国を表徴してゐるのだ。北の方の大なる産物ハ、コヒーで世界の需用の八十パルセントハ北国で供給するのだ。外ニ米麦と綿麦とが大なるものである。物ハ品ハ金ハ採掘してあるし、今甲物産とあるのハ金ハブラジルで世界の甲物がかゝる。日本からの移民ハ十二萬人ハ、多くが不毛の土地ハ五千萬町歩

コヒーを飲まする者が三千萬本である。日本の開拓振りは何
も鮮かだ、到底他の開墾狀態とは比較のできぬ程である。主流
化とは云へども、移民の健康狀態は、なほ甚だ良
好なるべきことである。大体まづ女が早く死亡する、婦人が
産んだ子である小兒の養育が甚だ遅い。こんな光景出か
せぬ根性で、無理な生活をやつてゐる婦人達
は別として、皆で一向衛生を考へないから、ここも多く
ある病氣、殊に日本移民の多くが罹つてゐるのは、トウホー
ムと十二支腸病であるが、これも衛生無視者からくるのか、
糞便は無人流し、洗濯は、ぶかぶかと、十二支腸な
罹るのは、此の病毒を目當てゝ飲むものが六十パーセント
も出てゐる。此のあるのは、うつりやすい病であるが、何人でも適

素質を缺き、医師も足りけれども、収容すべき病院もない。
日本移民の為めに、衛生設備である。すべて移民退化とは云ふが、現在のことを衛生を怠り
て行けば、移民の前途は、殆んど疫魔と罹り一村全滅の惨もあるべきものである。他方ある地で
も日本の移民の為をすると云ふこともある。若し此地を移民に与へるやうな
衛生的に、お為の施設を為すべきである。パナマ運河の開鑿の
レセップスが、黄熱病と云ふ疫魔の為めに
つぶされたのを見てルーズヴェルトの手で成功した。北の疫の媒介
は蚊であるとして之れを駆除する。八千萬弗の金を費し
たと云ふことである。どうしても斯の移民行為が大切である。
ブラジルは今日も日本移民を歓迎してゐるのだけれども、他の

拙者が起らぬの張元、日米条約を北国の親義を彼人が行くるの醫療の道を尊して やることであらう。これ人道上大切なことで、醫療不完全の彼の西洋に於ても之れを思慮しても尤こぶで あらうと。昨る藩医士官木造廉が口地を視察した帰くり、文政御今と派した大商であるが、後来事米の就を経る人もあるが当て所生就然る顧んれ、よく人を医務を使するこん急で、よく方面のみ存した言ふから、公示を欲くるあると思ふんる

（二月十一日の記）

○濱口首相の遭難が起つた。新聞あるこん、亦井上前首相の遭難が起つた。彼る亮暴の不祥事の数りの起ることは誠に遺憾の事である。陛下の聖慮

標原製

郎と大不敬のあつたのスツイ先頃であるこん、撃視庭は雨来とんで取締を若干しれのであるが、従来多くの数と共奏を浪費した肝要の事を ぬかるのは、是元帰が精神、及んだのまに祖概である。彼の事現さく未だ解まれるを二果に国家有用の人物を殺さやる真に遺恨のことと云はさうを得ない。自分は彼が思ふん、近年の世相は追々険悪に赴きつつあつて、人の言葉をいるるは、唯だ感情の馳するる儘かやで、思慮分別もなく、無謀矢鱈の評を敢て而る 動面が無い。政策がどんのと熟考を ぬ、国務大臣を置つて乱正賊毒と言ふ、新聞紙でもいと言辞を謹しまるべきことは、世界者い。個人きことが、昨日ある反響を與ふるものがあるが、現肥軍紀の荒まるといいつも術

ことを誤まれる際こそ大なるものを企つるものなり、濱に前首相と
郵船会社の、今日の前例に徴しても然り、教唆者の
実を欺る暴言を吐くものなることを云はざるを得ず。
一知半解の古年配者何人を問はず是非を知らん
唯だ社会の木鐸を以て任ずるものは不謹慎の誤あ
るの動さえも、軽信して直ち動くことのないである。世の中を誤る
べきものは一知半解の徒が直接行動に出ることもあるが、
その責任は寧ろ言論を慎まざるべからざるの事実上の教唆
をなすものの方に、北の教唆は無鍵を無くするも更
に濱の深いものだと云はねばならぬ。兎角近年は粗
暴な言葉をひかれる人が多い。或る大臣のごとき恐んのまくし
陛下の御叡慮を奉体して、謹んで動物の研究と御熟慮

と云ふが、まんざらも四海に御熟慮なき御研究は御所物と云ふが、まんざらも政務を御所物とも
つてゐない。と云ふ様なことを書いたのは石教濱に対ひ
れんとの人が、全体説味は誰れでもおつかぬ、まんを
解すべきである。北の方俗の人の深意を推し測る
ことも出来ず、必ずしも悪意がありとも思はれぬが、そ
の欠点は全く言辞の粗暴なるに基くものである。この等も世
相のある様を現はしたものとも見るべきであるが、謹慎の一例とも
のである。山平氏の謹慎の一例とも
所々様に載せ、山平が殺りて無濱とする様
で兵つ比の点、山平が殺りて無濱とする様
濱の宣言を以て、山平とも

標原製

待能なる口が利けるでもあるまい。切めて不徳の改まるまでも云つたら、兎かんたんにすぐであらう。唯だ我を通すことを考へるとすれば、微塵も物の分の分のわが自から思を改むる所以である。一微塵の欠陥もあるまい。文化の進むに従ひ人の言葉もゼントルメンライキレファインセイなるべし、近来の世相は逆行(退歩)とも謂へるものあり、数すべきことなり、敬て謹を実行することなり。

二月十一日記

○北京帝国図書館で六千四百種の資を投じて備へつけた写真機は実に人手を異にする出来栄えの文書類を撮影し得る新式のもので、エピイを低くする極簡

原製

法なりとうけたまはる。近代。図書の複製を為すものも追々生じ、その場合に写真機を携帯して図書館の書籍をも撮影し、それを原版として印刷するのであるから、本物の複製の為めに、或る必要の図書をも欲しいと思ふまで手数がかゝるのを手を入るゝことが多いが、図書館で這般の機械が備へつけとすれば、実行出来ることであるから、図書館と指定の大切な設備なるべしとの。此度三宅さんは写真の半紙大のものを持ち帰りたまふ。(挿入のうえの中間で截ち切つた)偶と面会の自分が図書館協会の時代の記憶に満ちる。今全部を掃去して、新全部を掃去して取捨おく

帝國大學圖書館長の爲に送別の宴を開き、席上市島會長の送別の辭、和田氏の謝辭あり。此日出席者三十八名。

七月十一日　本會評議員東京帝國大學附屬圖書館長和田萬吉氏圖書館事項視察の爲歐米各國に出張を命ぜられ、此日出發す。（明治四十三年四月十三日歸朝。）

十二月一日　本年度總會並に東京地方冬季例會を帝國圖書館内に開く。先づ總會を開きて幹事の會務及會計報告あり、次で市島會長當日の主要問題たる評議員半數改選の事を宣せしが、伊東祐穀、杉野文彌等諸氏の提言あり、結局留任者を抽籤にて定めし後更に新任者を投票にて採るに決して之を後刻に廻し、次で渡邊日比谷圖書館主事は豫て東京地方會の宿題となり特に調査委員に附託せられたる本會所定和漢書目錄編纂規則改正案につきて一應の説明をなし、之に對する總會の議決を求めしが、會長は此會にて即決することとせず、該案をば一應全國會員に配付し、一定日限内に各自意見の在る所を附簽して差出さしめ、更に之を從前の委員に附屬して考査の上、評議員會に於て最後の決定を爲す事としたき旨を滿場に謀りし　　孰れも異議無く、此くて該案の議事を終ふ。次で湯淺京都府立京都圖書館長の諸種展覽會に關する興味ある實驗談あり。其後過刻後廻しとせる評議員改選を執行す。以上を以て總會を閉ぢ、更に東京地方例會を開く。當例會には豫定によりて支那古版本、浮世草紙の二類を各自持寄り、之を一室に展列して相互の品評研究に供せり。此日例の如く晩餐會を催す。出席者德川賴倫侯以下五十二名、中に地方會員四名あり。

明治四十二年十月現在會員數

此年十月末日の調査に據るに、本會會員總計二百四十三名にして、中名譽會員四名、通常會員二百三十九名（在京百二十八名、地方百十名、在外一名）なり。之を明治四十年九月現在數（一百名）に對比

するに、百四十三名を增す。以て本會の近時遽に興隆發展せるを見るべし。

明治四十三年

二月二日　本會評議員會を東京帝國大學構内集會所に開き、和漢書目錄編纂概則に關する件、圖書館雜誌に丸善株式會社の廣告添附を承諾する件、來る八月ブリュクセルに開會の萬國書史學會に加盟する件、圖書館に關する專門語類編纂の件等を議す。此中目錄編纂概則につきては渡邊委員長昨年總會に於ける決議に基き一應全國各會員より意見を徵したる後、委員會の考査を經て茲に提出せる旨を述べ、直に評議に移りて二三字句の修正を行ひ他は原按通り可決す。是に於て該規則確定せり。自餘の諸件亦悉く可決せらる。

和漢書目錄編纂概則の制定

二月三日　文部大臣公私立圖書館施設に關し設立注意事項七項を擧げて各地方長官に訓令す。此は曩に圖書館設備準則公布につき本會より文部省に建議の反映と視るべきものとす。

圖書館備付書籍標準目錄編纂建議の受理

四月二十九日　和田東京帝國大學圖書館長歸朝歡迎會並に東京地方春季例會を學士會事務所に開く。先づ歡迎の宴を開き、席上市島會長の歡迎辭ありて、一同和田氏の爲に乾杯其健康を祝し、撤宴後和田氏の挨拶及「歐米巡廻談」あり、三時間に亘りて詳述す。右終りて地方例會に移り、曩に評議員會に於て議決せる圖書館に關する專門語類編纂の件を上議し、結局委員に附託し、同委員は之を會長の指名に一任するに決す。此日出席者德川賴倫侯以下四十六名。

七月二十一日　昨年本會に於て議決の上文部省に建言せし圖書館書籍標準目錄編纂の件此程當局に受理せられ、本日及翌二十二日田中帝國圖書館長、和田東京帝國大學附屬圖書館長、市島早稻田大學圖書館長、渡邊東京市日比谷圖書館長、今井大阪府立圖書館長、湯淺京都府立京都圖書館長、佐野山口

其内機械を一変し其の運用を改め記載する日如あらう

二月十三日記

○聖堂に栗山東坡を敬慕し奥を今年十月[illegible]
赤壁に擬し[illegible]舟遊を試むるを例とし左の詩
作するもの多し、栗山歿後倉成龍渚其の志を紹
き同じく赤壁の擬を為す、余頼惟柔の詩
韓一篇を贈る、即ち龍渚と同舟左の詩
也

彼公雄駕誰并驅　天下文士悉家奴　獨有栗
谷才思殊、維横筆力躍前趨、温文優々
泛舟急、壯語凜々立馬駒　景慕時挂赤
壁図、年々今夜極歡娛、去歳時移向仙
區、細聆蕭寂江上籟　三秋風月空長吁　遺編
去日猶凜乎、龍渚追奮復
開詩酒、斯文襟懷更快愉、江山録出胸
裡煙、休者）今日彼公無、一篇没後又一篇
右戊辰十月望前日龍渚
栗山先生墓　頼惟柔

此反故君家貴）其の巻中に合巻の件に文り（二月
十三日記）

○二月十三日午後一時書誌学会員と共に図書寮
に到り宋版十経許りを展覧す、内府本の存る已

てみるべきものなり出版されたものゝ中に誤謬が甚千あつた。
係しものゝ既往を見るの為に遂げれば、本の四隅
細い日蔭の出版と称する美を日録の解説をあるから
詳述の必要用かるものが寛永の大略を書き付ける
とおよそ左のごとくである

一 玉葉集 十四冊
大本十行本 袋打有

全部

一 東撰集
大本十行本
浅草文庫の印あるもの 清田長錦
人正義 長明の記あり、人正義は市

標原製

橋本綱常氏北国人の寄贈に係るもの
らる、市橋は近江蒲生郡四人生寺の産
主なり、蒲は和名抄に蒲生郡蒲生郡
り市橋は西大路と称し今も称ずるが鞍馬
人生寺と云ふ
宋代に大文豪の書が世時代に刻まれ
さを見て始めて感ずる如し。注目すべきは紙
質の日本の紙に似たることあり、北日程々の宋版
の新を見るに紙質一方ならず、後世の支那
紙と比べて日本翻刻のと殺るべきを見
るものあり、宋紙も実に研究すべ也

一崔舍人玉堂類藁　七冊
十行本　紫微集　栗山の鑑定記一冊
七冊

一誠齋集　四十三冊
十行本

一尚書正義
十五行本

一太平御覽
廿二字詰十三行　御宮数卷あり
紙映像紙と同じ

一通典　四冊
白紙補寫

卷尾に左の朱印を捺

模原製

す

宋飛鴻十四葉辛巳
歲御刻大宋建中靖國
元年大蔡　乾統元年

序あり

文求堂の不受圖書の内に此書一部四冊アり所定の七に比較し見るに輪廓も察知出二分程長く、面目文求本に比すれば一見古し、

日人即世研究の結果文求本は覆刻と判断せり、比較研究の必要大切なるかは日本の一例なり。

蝶綴も紙質相異紙に似り

一論衡　十二冊
第二巻十三葉脱　昌平黌官本を以て校合ス
一景文集　十二行本
一文中子　十四行本「任遠」の印　兼椒山の印三顆を捺す
一御注孝経　十五行　元板翻刻
一春秋経傳集解　十五冊
八行本　金沢文庫舊蔵

模原製

此板摺の本い古刷にて見も日に亦すること
ちょうどの白本ちょう
任巻ちょう尤の二経同
一大学般経　御冊
一首楞厳経
歴応二年春の立願経の
ある常版覆刻ちょう
この立の此の版経も尤く宮日を経ず
ものちょうがいつも自刻を感ず南
時任巻の文ちょう任書の覆刻する
支那の刻者を倣ちょう成さしめること
ひけし、中ちょう番の日本人もあるべき

が往々刻苦の名の存するものを見る時

文部人

御注書紙を納めらるるに豊宮崎文庫の

謝状を乞ふ其全文左のごし

謹受

御注書紙　一冊

右新刊

獻納

大神宮文庫誠敬奉録、神明御歌

勝籤表彰次傳千祝

謹状

榛原製

文政十年丁亥八月

豊宮崎文庫　書生

印大
宮崎文庫

御注書紙を獻納し奉る際納言と称したる謝状

を当時の謝状の一形式と見るべきものなり

こゝに掲ぐ

往年清水の提供せる使其最も書籍に通ず

紙其外古の提供せる者の提供せる

奏の早稲田に来る余が当時発見せる館本

も見る後府本の一説を持つ。余は大隈侯

に清水と田中光顕（宮内大臣）に紙状を得た

特に清使の為の西廊下の一境を許さんに、余も二使
に同伴し初めて西廊下に往計りも見れ
ば、美麗初田を世界数回あり、之を生涯の思出
に清使と共に写さるる也、清使官人は其二人づつ
の書生を伴ひ、或は才人を聞えもろう老成の
序跋などを勝官にしめらるる。余は四章
卒出陳同者の同行を以て、二使に評點を
附すべきを以て、二氏は交々圈點を二三四或
は五を附して月是の一時中に最も點を附し
たる古詩本の左傳の若子子子しことを記臨す
同者蔡が考し滄浪りなる宋本寒山詩は輪廓
外の飛白を断りぬき書書一帙に特清使

榛原製

なる故を以て二使の一顧の異くさるし比者分
明の出陳されたるは巻末の異名満廊の十
行許の細點なれども、漢は元来同者にも
まるものあるべし、その識語のぬき論するな
ど、而して却つて義的に重きとなるき
故に一冊を無残に載せ切つて帙に張り
つけられ何等無智なりと云ふ一笑を禁
じ得ざりき、此一帙とあめる栄の基本
池内清不の識語あり、初め此者を杉浦情兵
衛の見るとあり、識語中は島春庵の名も
見へず、春庵の寄せるところの知己と呼し易
と別人なる同者也

図書寮の蔵書終り一行の四人十二三名安田美次郎氏と行く、一行中京都の所出大阪の今井貫一氏等今日の面白き話等もあれ

安田氏もまた示されたる先祖記録の文録志林一巻が安田の手に帰したのを示されたる。

志林ハ六巻九千五百の目録の首に

梁書元帝論移都会一首 とあり

背面の紙に

勝天王般若波羅蜜経巻第一の

ある

志林の中 冷然院の印がある、此院は文徳

紀十七年の四録に冷然院とあるから、

橘原蔵

其以前の書写と見なければならぬやうの

ものである

大阪の青柳鹿田静七氏の所蔵の法華義疏古写

を取寄せて見たるに出して示さる義を見るに

第二稿と思はれ、刊本を更に考訂した

ものと思はる。異紙の横山氏の賛書と

あるハ不島春屋の考訂を経たるものから

し、活字版の程度の手を経たると見しく

今度中の写したに依て極るとし、海保漁村

が筆をかくしたるものあると云ふ、氏は文章

博士 菅原孝標 が筆したるのが国書史

学の為に役立ちたるとしたと云ふことである

る、

新村出から手紙 福山文庫で見た大四條の韓非子
既英毛氏 の新たに世界に公刊の校刊一大のものと大明
の報を得たが、此度新しく写し所望したと、
四庫全書二部 [illegible] 共に活字本也、一部は楽
前度に出した写本の特別に白紙を選び
表紙の厚い職製を用ひ、一部は家蔵
然るべきものと思る粗紙に
印刷したものとの二色
あるも帝国の文部省へ献上の二色
ある

西洞三年 異注疏 一巻

複原製

皆面 建保四年 東大寺
尊勝院宗性
とあり、四十年とあり 紀宗性は 東
大寺に於ける 有名なる僧侶の署
名の 文書は 性なる僧侶の署
の色 [illegible] の書 [illegible] 之上げ
[illegible]

光悦本三十二歌仙 一巻
光悦は三十二歌仙の 海布 [illegible]
あるが、この 初撰 と [illegible] 極め
て 解 [illegible] 墨 [illegible] 刷り
[illegible] 歌 [illegible] 紙面

世の煙業をく土作家の冬歌仙を著
する面白き話題しも筆特をもつる土
作家の人物画ハこんを見て海雅きを
知る

雑誌中島田翁の話が出きそうな出た。今年中の
八特ま役が舊書者を研究した人もあつて彼
れの出藍目を誤を奉けも盛人ま攻撃したの
も一無ひ事なり。

日本の新ま文の作きたの新お俳句の載せてある自分ま
耳寄りの話で、自分の新ま文ハ新ま文ハ新ま文ハ新ま文ハ
自分の新の角の新の角の新の角の新の角の新の角の新の角
四角の三角の角老ハ三角ま文ハ三角の角の三角の角の三角

標原製

續古老雜話（廿七）

鏡淵生

柾屋小路四階の話

西濱町三　板倉清次郎翁（八十五歳）

柾屋 小路は一名物として殘つてゐるあの四階は昔町會所のあつた所で和納付の中原と私の親族板倉長八が相談して東京にあつたブールス商賣（米穀相場會所）に倣た仕事をする目的で造つたそれは明治二十二年九月かと思ふが其頃の

物價 は安くて嫁成までの經費は二萬圓であつた。四階は八疊敷に入口は四疊あつて樣子が廻つてある。棟梁は川崎甚造と云ふ原のもので巧者の大工であつた。此の男が一心こめて造つたのであつた。他門の悪も顧るしつかりしてゐる。

見込 がはづれ、止むなくの問屋仲買衆が始め贅沢したが工の頃には首を引込めたので己れの雜貨品を出し又は公債の賣買を勧み新潟商會と看板をかけたが、收支償はずして旅人宿に轉更した。しかしそれでも客は十人内外で立ち行かず、遂に板倉は北海道へ逃げ去つた。三階も下もおなじ室數で小さな室だが八疊敷が二十四五室あつて四十疊敷位の廣間が二階。入口の正面にあつた。壁は間取りによつて三角又は鍋に柱をくくり込んだ所もあり

今の セメント等ではなく全く土藏造りの堅牢なものである米穀取引所同樣商品の取引場とする計畫もあつたが之が實現せず困つてゐたのを小出氏の所有となつたのだが、こんな大きな空屋がもしも日本造りであつたら必ず化物が出るのだが其潔のないのは雜物が馬宇で窓室の中央にあるから化物も遠慮して出られぬのであらう

（註）予の友人來つて曰く昔四階は板倉が持ち切れず入札となつたが明治三十二年頃第四銀行が五千五百圓のところを小出氏は六千圓で落札し諸道具を運び入れ密に築かれて當に賣つくらであるから一句を吟じたと云ふきいた。即ち「板倉と思へば今は居ない倉、外は土倉中はまつくら」。

の人が北の地を今年初めて見る者は誰でも必ず感慨深く
を知つて、他の人々もそれぞれ記臆するものやうなことがこ
れが移る所に於ける人の民政堂の前身時代の事
を心の中に時の無命のいひあつて、今も極度や感動を
るときこれ北の地を見つめるのいるものハナ
の枝人の移る所ハ今如事実ひある
事柔のうじうが北方の俚歌を伝へる中に伝へ
うじ才姉ひの自分をもつて耳を傾けさせることがある
雪の移る時の
灯が見へぬ
ナント情うい情況ひあるまいか、吹雪がうつ
マサカ移る時の灯が見へるまいと思うくいるへ

標原製

高かし伝説を紙に目瞭の例をあるを知もるへ
手始め海岸から三里を望人なる高野が海路
を辿めて今々移す恰好を見ることが出来るが
見て殺べて伝説の写ハ一つ二つ誰那人あるを灯
が見へる云ハうとハが一歌ハ所数よりハと
思しい。高ハ日伝説俚謡の一
沖で移のうく考きけ心、舟乗り家業が
やめうんぬ
こんな海の情況を移るうる風俗と云へやうが寺
人も路ハ御手うとして！みるが、この俚謡をかつよく
歌つたこのうる
松島ジンクの一つ左のめき（ものがる

柿岡から柿岡まで河内美濃、美作、越後の
海が無かるから、ハア無かろう、同じ美濃、
美作、越後の海しか、無かろう、アーヤレヤレ
こんの柿岡ジクリの三階が有しに三階が得られる不二物
微かなる。歌舞伎地配をもてまする文化、その地の人びと
人心配も分らぬいかも知れぬ人が、海しのあるのが主の点
の妙けをもすといふ不二味ちうしの味がある、ジン
クは猥褻のものが多いが、やはいわるの味あべきものが
ある

二月十四日記

○第文行堂を過る一三稿本を得た中に諸侯師
森林里猿が諸侯体に福嶋将軍家の侍ともの
しに原稿三冊を得た。えんあ谷不倒が大好あり

訪ずに記者がすこし頃、同紙に掲載を期待する家田
正ともに断り記事を掲げられたい米遠慮ともに、中止を
強勧したのが、芳稿は全部脱稿されてあるのに、
中絶とするのは、拙者記者が原稿の手元を差移
が差とすくに保存されて今日に至つたと云ふ、皆
も養蓄に安正が大角三寸のセルに青面とお貞面
貼付してあり、中止の事を拙稿にて為る高橋義春
の谷の復活もある

森林里猿の諸侯師ひとある、殊さ甲さ諸侯を
得意とす、荒き作福島あるの家僕ひとあり
ひ、明る勉強家ひ渡書文のものを明文又諸
侯を喜び、遂に其人に入りて諸侯のとなる、福

島大作西伯里亜騎馬旅行を口演し名を著ぐ
日露戦争中は従軍として満洲の戦に従ひ
し講演を演じて兵士を慰安せり
北海道大地震は明治三十六年一月大阪毎日新聞
の需に応じて宮城県相島氏を面白
き材を求め、脱稿九十四回に及び掲載する
もの偉かれ十四回に及びし頃、福島大佐(南
時は少佐)なり旅団を率ひ遼東に出発
して撤回するに臨み、遼東の余光文
の修正掲載のことを懇請あり、光信の従
来黒猫が口演し騎馬旅行とは異なる大
将の生涯なりし生涯のことを録したるに、家庭

横原製

のうきまひなびき驚く真相を穿ちうるものがあつた
為の大物なりし為紙のめく中止方を依頼したので
ありたれ、其時大佐は未だ帰朝せざりしなりと思ふ
北海道は黒猫の自業自得なる、市一四五市十一四
年間は流三十三年月の大阪毎日新聞紙上
に掲載されたるものである。
とて掲載せざる前に没せられし、二三
回は脱稿したるものなれども、福島大佐の
傷ましく、講演中の遺族なるが実に掘り出したる
ものなるから、氷河の知り得ざる材料があるから
なれども、殊に死後の遺族は全く世に未発表のまま

ちるから、貴ふる珍重すべきものである。
上記の如く此稿は余の旅南を虎し、其中衣の
ご時に幕れんとしまんとあるから、其後余の心底
を残り及ぶと混同してあるのを今年志賀
を写し書冊の見るとかく

大正八年二月　　永谷不倒識

田歌すること福島大佐が西伯利亜に騎馬旅行を企てと
きは、余は後援者の一人なりしが、其時大佐の壮挙は死者の人気を惹し、大佐が余と無事
切腹とすると、其等記者は其の功の偉なるを極力紙上
に称し、三義法師の壮挙を比するに、きものと称する

と思ひ起す、亦新橋芸者の四五の記者と共に野次
的に出迎へ、田辺と喝采し、ることとも憶起す、
当時大佐の歓迎会は法方の制限なかりしが、其等もまた
加つて大佐と握手することを快とせり。今此稿を拾し、此人
を思ひ就て今昔の感を抱くものあるなり　二月吉日記

記。又室村幸雄氏より須義南翠　三家の
草稿を得たり、皆雑誌に掲載のものを俗本
しるしたるもの　室村の「赤りごま」「義法の妙味」
二篇得たりの「百合義大佐と甲賀三郎」の考証
一篇、南翠の「鏡中蛇」上篇を収めて一冊
とす、これも永谷不倒の不朽なり、余は此の流
以来文学法家の苦労を忘きるの苦を、之も亦

る也

○松書を治めらるる甲乙丙丁相踵ぐ間く来りて漫書す、筆を選び業法を研する遑あらず、但此頃は依頼の人々切なるを以て得ず、こん角の秀麗を愛す、古年の為めに揮毫の一二云く雄飛他の一二云く壮思雲飛婦人の為めに揮毫の一二云く清兵、庵主の為めに云く門外雖春昨何是書中春、風流の語を記むるの、為めに云く溪新鶯忘死農村の人の為めに云く把酒欲来麻、偉人の扇に高類を活めるの為めに云く雄魂鎮四方、吐嘆数家成り終に伊豆山相模屋演田の為めに遠慶の三

榛原製

家を化の為に書に記云く遠慶は熱海某の別荘庵前年明治四十四年一月偶興筆未観の拙今若之感乃書之為剩墨而已、遠慶は嘗て人今丈夫を養ぐ也。

○霞却在平易、是れ朱晴庵の語也一紙に云く淡好書法の拙行略す也人、人生の大快楽也此の二紙敢て人の嘱に応するあるも他の人の需に応じたるなり、墨と紙漸やく素と

する時は手筆漸やく熟す、何時揮毫の時素人の悉みを欺する也

二月十五日記

○来一寺庵に寄附する七ルパンと号する小説法を

小説

寒雨の夜

澤村寅二郎

銀座の裏通り、尾張町から近いところに、女給を置かないで、主婦一人と老實なバーテンダーだけで、經營してゐる小さなカフエがある。主婦は五十に近いが、昔はさこそと思はれる美人で、今もその透き通るやうに白い皮膚に、水の垂るやうな艶つぽいお化粧をして、わざとらしくなくにこやかに振りまく愛嬌は、男の心をひきつけるに十分な力を持つてゐる。その修道院の庵室を思はせるやうな高雅な淀い部屋の飾りつけは、人の氣分を落つかせ、客は大抵四十を越した分別者で、大部分が互に顔馴染である。かういへば、その道の通人は「ああ、あすこか」と、うなづくにきまつてゐる上品なカフエ。

僕は、その主婦の魅力と、その老實な——もと英國大使館に勤めてゐたといふ——バーテンの造るカクテルの特種な香味にひきつけられて、一週に一度位は缺かさず訪れたものだ。行くと、いつもきまつて隅の方の席に、燈火に顔をそむけるやうにして坐りながら、黄金色のウヰスキーの小さなコップを前にして、誰と口をきくでもなく、然し至極居心地のよさうな樣子で、時には×語の新聞などを讀んでゐる小柄の老人がゐた。老人といつても、一年はそんなに取つてゐなかつたかもしれないが、濃い頭髪は艶のない鼠色に白けて、背が少し前にかがみ、何となく人を怯るやうな樣子もあつた。主婦はこの老人に限つて、別にお愛想をするでもなく、いはば自分のうちの人同樣に扱つてゐるやうだつた。

或る晩——十一月の末の寒い雨が、夕立のやうにどうどう降つて、季節はづれの雷が、氣味悪い音を、遠くの空に立ててゐる、何でも金曜の夜——の九時過ぎ自分は近くの支那料理屋で催された宴會が案外早く終つて、今から直ぐ歸るのも惜しいやうな氣がして、雨の止むのを待合せるつもりで、そのカフエへ飛びこんでみると、生憎主婦は病氣か何かで顔を見せず、バーテンだけが、酒場の中の腰掛に坐つて、老眼鏡をかけて、夕刊を讀んでゐた。お客は誰もゐないで、唯例の小柄の老人だけが、この寒雨の夜にも拘らず、矢張りいつもの席に同じやうな態度で、ウヰスキーを嘗めてゐた。僕は便所へ行かうとして、その老人のテーブルを通り過ぎる時、多少醉つてゐたせゐもあつて、よろよろとしてテー

ブルに突き當り、卓上のコップをひつくり返した。「これは大變失禮しました」と、僕は、老人が躊躇するのも構はず、幾分相手を見くびつた心持もあつて、早速バーテンに命じて、ヂョンニイ・ウオーカーを瓶ごと取寄せ、まづ老人のコップを一杯にし、自分も同じテーブルに椅子を引よせて、一しよに酒を飲み出した。

「あなたは、毎晩のやうに、ここへいらつしやるやうだが、この辺近くですか」と僕が暫くして聞くと、

「いいえ、本郷の方です」

「ちや、今晩も本郷から、この雨の中を、いらしたのですか」

「ハー、私は獨りでして、夕飯を食べますと、つい寂しくなるものですから、本郷の下宿からボツボツ歩いて——あの邊には、かういふ落着いた酒場がありませんから——この銀座まで來て、ここでウヰスキーを飲むのを、毎晩の樂しみにしてゐます」

見ると、今晩もこのひどい雨の中を歩いてやつて來たらしく、肱から、ヅボンの裾の方がだいぶ濡れてゐた。

「それぢや風をひくといけませんから、大いにおやりなさい、御遠慮なく」と、僕は、この老人少々變なところがあると思ひながら、その妙に怯えたやうで同時に人なつこいところのある眼つきに、幾分の憐れみと多分の心安さを感じて、尙もウヰスキーを勸めると、老人は、やや卑屈らしく、「では御馳走になります」といつて、幾杯も傾けた。

酒がまはつて來たのと、あたりに氣がねをする客も見えないので（パーテンは居睡りを始めたやうだつた）、老人はいかにも打くつろいだ樣子で、平生の無口に似合はず、いろいろと僕の話相手になつて、當時やかましかつた外交問題などを論じたが、この老人が相當海外の事情にも通じ、外國語も達者なやうなので、

「今あなたは、どういふ仕事をしていらつしやるのですか」、と尋ねてみると、

「今はただ遊んでゐるのですが、元は飜譯をやつてゐました」

「では何か雜誌か書物に御執筆なすつたのですか」

老人は、ちよつと、あたりを見まはして、小聲になつて、

「これは、あなただけにお話しするのですが——どうぞ祕密にしてください——實は私は、あの——T大學名譽教授S君の飜譯ですね、あの手傳をしてゐたのです」

「ああ、さうですか、ぢやあの名飜譯の下譯をなすつたのですか」

老人は酒のせゐもあつたか、やや興奮した調を上げて、少し躊躇するやうだつたが、云はずに我慢が出來ないといつた調子で、ウヰスキーの殘りを、ぐつとあふつて（——その手は震えてゐた——）一段と聲をひそめながら、

「實はね、あの所謂名飜譯なるものは、——實は私が皆やつたんです」

「何ですつて！　有名な××の飜譯も、あなたが譯したとおつしやるのですか！」

僕は半信半疑で、この老人、少し頭がどうかしてゐるのでない

かと思つた。といふのは、××の飜譯は全部××卷、T大學名譽教授S博士の一生涯の大事業として、海外までもその功績をたたへられ、日本×文學界の名飜譯として定評があつたからである。

「私は、これで可なり詰らぬ目にあつてゐますが、それも然し身から出た錆と思つて、諦めてゐるんです」と、悄然としてうつ向いた老人の、酒に赤くなつて、それだけ白髪の目だつ襟元のやつれが痛ましく感ぜられた。

折から外は、雨は止んだが、寒風は吹きつのつて來たらしく、カフエの硝子戸がガタガタと搖れた。然し中は瓦斯ストーブとウヰスキーの暖味で、却つて居心地よく、老人は平生無口の人が調子に乗ると、無闇とお喋舌になるやうに、問はれもせぬ身の上話しを獨り語のやうに話し出した。

「私はもとは第一××學校の×語の教授で（もうかれこれ二十年の昔になりますか）當時頭のよいので相當評判もよく、私立大學の豫科をかけ持つたり、雜誌に執筆したりして、收入も多かつたし、家庭の良い父、良い夫として、何不足のない生活をしてゐたのですが、丁度その頃から出來始めた日本橋の或る有名なカフエの女給と戀に落ち　その時分は、まだ女給といふ名が出來てゐませんでした）、女給は夫のある身、私は妻子のある學校教師、分別盛りの四十に近い歳をしてどういふ魔がさしたものか、どうしてもその女が思ひきれず、女も私の何處にどう惚れたのか、二人はすつかり、深みに落ちこみ、そのうち女給の夫には感づかれ、學校の方も缺勤がちになつて校長から睨まれ、どうにもかうにも動きがつかなくなつて、今から思ふと馬鹿な話ですが、一しよに死なう、死にませうで、書物など賣拂つて相當の旅費を工面して、日本橋や銀座の通りに、もう歳末の大賣出しの旗や、氣の早い松かざりの賑やかに飾られる冬の休みの初め、名殘りの旅に京阪見物としやれこみ、手に手をとつて東京を駈落ちしたのです――私も西洋通を以て任じながら、矢張りいざとなると、梅川忠兵衞や小春治兵衞を祖先に持つ、純粹の日本人ですよ――さして最後の死に場所を、いろいろと考へた末、京都の北東にあたる比叡の山中ときめたのでした、その頃はまだケイブルカーが出來てゐませんので冬は全く人氣がありませんでした。下から見た時は、雪なんかないと思つたのが、白川の流に沿つて登つて行くうち、案外雪が深く、下駄ばきの女給――しづ子といひましたが――は、大分難澁しました。然し灰色の空を衝く眞黒な杉の立木、綠の瓦、朱塗の堂宇の雪に埋れた景色は、今も鮮に眼さきにちらつきます。或る寺の側の誰もゐない戸の閉つた茶店の中で、京の祇園で買つて來た鮨と日本酒とで、最後の酒盛をして――その時女は二十一、鳥邊山ぢやありませんが、女も今日を最後と思つたか、化粧も念入りにして、仕立てて間もない眞赤な長襦袢を下に着て――むつちりと肥つた白い肌は、なかなか魅惑的でしたが――暗い小屋の中に白く浮き出すその顏――眼をつぶつて振り仰いだその口唇に、最後のキスをして――いや、あんまり委しいことはよしませう――

十とにかく私は女を縊り殺して、自分も死なうとしたが、雪あかりに蒼ざめた女の死に顏を見ると、元來臆病者の私は、急に怖くなつて、夢中でそこを逃げ出して山を降り、大津のケチな宿屋で、ものの十日も潛伏してゐましたが、たうとう捕つて、自殺幇助の罪で、二年ばかり入獄したのです。丁度その頃、妻は妊娠中で生活の苦勞や私の心配やらで、八ケ月といふ身重のまま敗血症か何かで亡くなり――全く可愛さうなことをしたものです――後の子供二人は親戚が預つてくれました。出獄してみると、職には離れ、誰も相手にはしてくれず、ああ、あの時しづ子と一しよに死ねば、こんな生耻はかくまいものと何度死なうと思つたか知れませんでしたが、或日偶然、昔の同窓のよしみで、S君が私を救つてくれ、ただ食はしてもらふのも濟まないので、暇にあかして××の飜譯をやつたのです。それをS君が見て――あの君は、講義や講演はなかなか旨いが、×語は實をいふとちつとも本當に讀めない人で、元から語學のかんの悪い方でしたが、何しろ私とちがつて努力家で、記憶が馬鹿に強く、また書物を集めるのが上手でした――そこで、「ぢや、おれの名前にして出版しよう」といふことになり、――あの先生――ところどころに筆を入れましたが、却つて改悪でした――いよいよ出してみると、非常な評判をうけ、到頭××四十卷全部を、私が飜譯することになつてしまつたのです。ま、あ、あの男もあの飜譯のお蔭で、日本、いや世界の學界に、不朽とまではいかなくとも、永く記憶されるでせうし――今度新築した――家も、その印税の一部で建てたのですが――考へると馬鹿馬鹿しくもなります。然し一旦ああしたところへ行くと、人間も意氣地がなくなり。まあ、かうやつて、毎晩好きなウヰスキーを飲めるのも、あの君のお蔭と思へば腹も立ちません――いやもう澤山です。もう十分頂戴しました――（と、小皿の南京豆をつまみながら）――然し私のやうな樣の下の力持ちをする人間も、この世には隨分多いことでせうよ」といつて、老人は太い溜息をもらしたのであつた。（昭和六年十二月八日作）

大田黒元雄氏の激賞せる

セルパン・ネクタイ

「ネクタイ談義」の筆者、世界の流行通、大田黒元雄氏が蒐集のロンドン製ネクタイを複製した珍品で、その出來上りのよさ、絹の質の上等なことは、氏も激賞されてゐます。

みどり色、えんじ色の二種あり。

定價　二圓八十錢
（送料十五錢）

東京市麹町區一番町五
第一書房代理部
振替東京六四二二三番

文藝春秋
昭和十七年三月號

置くとして、更にもう一つ疑問がある。それは大槻如電翁の「洋學年表」に掲げられた大塚同庵についての記事である。

「同庵、初稱勝藏、幕府普請役なり、機智あり、シイボルトの來る、其客館に出入して異聞を索む、一日、シ氏いふ、日本芝居、團十郎といふ役者あるべし、一度其人に逢ひたしと、勝藏直に深川木場の宅に赴き其由を告ぐ、團十郎（七代目）もとより好事の男なれば、同行して長崎屋（蘭人の宿屋）に至る、シ氏一見して其人にあらずといひ、一枚の錦畫を示す、市川十八番の暫の畫姿なりき、團十郎うなづき、自宅より衣裳・化粧道具等取寄せて、顏ぐましてトリ烏帽子いたゞき、大紋衣つけ、一にらみせしに、シ氏手を拍て大に悅び、此人也、此人也とあまたゝび拜謝せしとぞ。」

「高橋（作左衛門）の獄起るに及び、此事も露見せしかば、烏帽子大紋は格式ある服裝なるに、舞臺の上は差支なしとするも、通常人家に於て着用する、不都合の至とありて、團十郎は叱責され、勝藏も連座して隱居申渡され、家祿を弟清右衛門して嗣がしむ、是に於て勝藏は蘭方醫者もて身を支へんと、大槻磐里に就て蘭學讀習ひ、尋で長崎に遊び、楠林宗達の門に醫術を學ぶ、是年（天保四年）歸東して醫家を立て、同庵と改稱す。」

シイボルトが江戸へ來たのは、文政九年四月であるが、南北はこれにそつくり筋を、脚色してこれより三年前の文政元年十一月、江戸玉川座で上場されて居る。それが不思議である。

この脚本の題名は「四天王產湯（うぶゆ）の玉川」で、その二番目に市川團十郎の丙と芝居茶屋和泉屋の奥二階といふ二場があり、團十郎の役を七世團十郎自身がつとめて居る。顏見世の前夜、團十郎の丙で先代白猿（五世團十郎）の十三回忌を營んで居る所へ大明（たゝみ）の玉眼といふ支那人が、日本の團十郎に近附きになりたいと通辭に連れられて來るが、素顏の團十郎を暫の錦繪と引合はせて見て似せ者だといふ。それで團十郎は暫の拵へをして、茶屋の二階で改めて支那人に對面するといふ筋である。オランダ人を支那人に替へたゞけで、跡はそつくりである。其シイボルトの事實を脚色したとして、脚色の方が事實より三年前に出來て居るといふのは理窟に合はぬ。また現にシイボルトの紀行を見ても其ういふ事は記してない。それは枝葉の瑣事だから紀行に記さなかつたとも思はれるが、團十郎の方にも其ういふ科で所罰されたといふ記錄は殘つて居ない。もし此れを合理的に解釋しようとすれば、

（一）シイボルトとは別な外國人が、文政元年以前に江戸へ來て、右のやうな事實があつたのを、南北が自分の作の材料とした。でなければ

（二）南北の作は全く自分の空想によつたので、右のやうな事實は全く無い。そしてシイボルトや大塚同庵の事は南北の脚本から附會された虛說である。

この二つのうちの孰れかで無くては成らぬが、二世團十郎の「矢の根五郎」の繪を見た支那僧が、日本に市川團十郎といふ力者ありやと尋ねた事が「歌舞伎年代記」に載せてある。南北はその咄から思ひついて、二世團十郎を七世團十郎に、「矢の根五郎」を「暫」に替へて此の脚本を作つたと考へられない事はない。だが、「ロメオ」の飜案をした南北だけに、第一說を本當にした方が咄は面白くなる。

なほ大塚同庵が、そのゝち嘉永六年に「熕砲發射表」を出版した

事は「洋學年表」にも、齋藤月岑の「巷談操事」にも記してある。また異國船が渡來してから西洋の砲術が江戸に流行して、同庵が向島邊でその學塾を開いて居たといふ事を或る書で見た。

○義の根基の結果は例の如く政府側の多數を基くに日本の選擧界はいつも（いくらか例外もあるが）政府與黨が勝つと極まつてゐるが、輕々しきものであるのに、野黨との差の甚しいことである。政友會は黨員數時代の二百八十を得たことがあつた。えを日會の黄金時代と云ふべきか。今日八名の優勝を三名を突破するまでであつた。

野黨の大敗をこれの原因さまざまあらう。曰く干渉、曰く保護。曰く選擧法の欠點、前の二者はいつも野黨が選擧法で不利を感ずることであるが、大切の場合は野黨の選擧法が意人の毒手を作れることと、買ふこと、の選擧と例のようにもいつも大切の場

今の統帥を失つたことい、基督教への金融の障害を生ぜ
（此ことは、ずいぶんさるこれまでの相違）をまねく。
も更らに大なる原因は、民政黨が多數の議員を有しまた
ら、時局を誤し外交をも妨害するも自から收拾が出来ず、自か
ら潰えることであらう。絶對多數を有しまた自分が滅
潰する例はないけれども、かゝ若樞内閣の辭職はみずから不公
理で、國民をして頼みなき感を抱かしめる相違なん。
政策の得失ともい、今の基民主の充分理解さへよ
うがなへ。まして理解のまゝ進入ひみなへ。全
解禁は免れし不利な政策とも。密輸も決して
民利を害する政策なるへ。日支の時局を陸海の調和を
抑へて、平和を道すくことをかめれ故に原外交を一概に軟

弱外交とまこと出来なへ。併しながら日本の大衆の未だ
立上つた政策を受入れる頭腦を持つてゐないから、不景氣
と緊縮や金の解禁の為めとして、外交の強かりを元
義のごとしとする。いつも政策の粗笨は政友会の持
前で、これが偶ま大衆を捉する、或人とえが政友会の
統制のもとに、あつて、大衆理解を今の難い基礎の
会を捨て、粗笨的政策を攻撃
することが悪宣傳になる。切つて動を基する、都市
の流れに英必宣傳をいい乗らるへが農村とすると、偏り難
い影響がある。何んとこあるも民政黨の弱點は多數を
別して長りすることは、自から前憶したこと
である。此點を攻撃されたは、民政黨も実は顔色がな

いの政友会もいまだ基礎を拡張し、発芽の折柄多数の投票を民政党に奪はれるか、その多数の侵害を蒙ることは、自から崩潰して発芽の信望を背いた、あのザマは何んである。政党を占めても、同じ行詰りを繰り返すことは、おなじことである。基礎民党を解散して今後せしむる政治方針をいうのである。

民政党の政策を、らいらくが解散を乞ひ真剣味を欠いたことは、争はれない。党が多数の一部でも、仕方を包含する一派と頑城の一派の事実を捉つてみる二派とも無拘争の渦中に陥るか、二派共に政友の二人に勧し民政の一人を出すの無拘

争は敗のもとである。一蓑を後ろに輸したのであることは云ふまでもなく、向ふ見ずと似たものがあるこちらであつて民政の無力を言ふのである。民政党内閣の基礎の為めに脱党して別隊を組織して、民政党の基礎を崩壊せしめんとする。民政党内閣は突如として解散し、善後の策も何もないのは、立憲政治の崩壊である。

以上のごとく考へると政友会が強くなつたのは民政党が弱かつた為め勝を奪つたと云ふ方が妥当であらう。政友会が未曾有の多数を制したからとて、外国のごと

国民自覚の信念が政友会の情と比とハ云いながら、なかし政黨政治の制度の下ではハ投票の実績いかんとうあらうとも、多数を得たるものを以て、国民の信念のあるものとするとも外に無い。自分等ハ黨派根性を全然離れて、政と政権を把持しつゝある政友会殊に日支重大事件に直面しつゝある政友会内閣が、世論の多数を占めたることも、時機を得たりと思ハるゝなり。国民の多数の投票を得て主つるある政府に強よい政府であるべきなり。若しつゝめ時局に対する現内閣に対する不満を有する人々ハ政府が是迄のことを何と見るか世界の列強ハ之をどう見るか、日本国民の輿論の

榛原製

ある所ハ看取されるであらう。此の結果〔第〕挙の結果民政黨が勝つたとしても、民政黨政府ハ全部辞表をさしやる筈である。前に申つた外交方針を変ずる事なく行かぬ。若し仮令投票の結果が政友民政両党の間あつたとしても、あ事が議会に於ては絶対多数で、内外に対して世論の表示と成らず、頗る微温のことを出つくして勝手なやらせるかよい。之等の結果ハ大局より見れば時機を得たるものと思ふ。唯だ多数を制するものゝ性々専恣横暴と陥り、政友会ハ有力者の反省が為め歴史がある。監視を要することハ言ふと待つなり。

○本国より数年中

天罡地煞図　二冊

を獲り、書余受読の書より、余往年獲て今ハ失ふ
と云へ実ハ此書今者獲易からざるより、乎游の人利
を画するもの漁荘陸通の筆を可とす。馬琴蔵
本中二巻の模写本を、一ハ数々物すれ一ハ載々物より、
皆陸通本を田舎に写したるもの歟。模写の本と可
なハ、清写(?)華山の刊本とす、此書の巻末に陸通の左
の識語あり

漁荘陸通法李龍眠筆　松西冷之竹橋草
巻　口口

本の龍眠の筆跡を存する不尤も味あるべし、余此書

榛原製

を愛するハ筆跡を存するの刻の精なるより、巻末の
を閲するに玉山林春夫の鐫とあるも并せもの八二八
の名を刻す、巻末の跋ハ江戸蓮堂林任刻法を
云りし刻の容易なりしことを云ふ、此の刊本特に
刻刷に苦心したるこのとを見へたり。此書全楽堂
(?)四華山の印と云ひ偽ふんなり、華堂の序跋も、
唯此華山の印ハ毒(?)花阪(?)桐に(?)あるのみ
なるべし、山内香雪書(?)南文の書も亦全
楽堂の印を捺したるあり、此等を以て攷へハ華
山が道楽に刻せしめたるものと思ハる。殊に余の表
こゝろハ、毎巻の首に全楽堂の朱印を捺す、以
て華山の手沢本なることを知るか故也　二月廿三日

閑に乗じて玩賞、百八の人物皆態を異にして
共に生来なり、剽盗と云へども未だ豪傑の風
風貌なり骨すべらかなる気魄を備へる所尤
も喜ばるべし、宋江は流石に欽神風采堂々
たる曾知深は猛獰と称すべき酔虎の如く一の
らずと雖もあれども其の面貌羅漢の如く殺
後の良寛に似たるも之の地史進の顆逸半裸
文身を露すも別に美人を称するに
の美くも人間の内なる美人なり馬上の唐三娘
の姿なる云桃花馬上女英雄柳葉神刀石楊
紅と、外に酒店の女二三を添へ新鮮を破る
西の国も少くなく皆殺伐なり、北の人物国の

特長は細後なるも力強き点あり、山華山の特長
とする所は、峯山或は北芽の国に依て潜る
不公、北国情にあらざるに二ヶ所改換あり、然れども
総体裏新なり敢て展観と妨げなし

○細後の地名は魚川ハ女川の誤なるイトウラを
以て名とすと云へども、結魚なるものかを
知らず傳に皇和魚譜云へり国なり、長さ二三寸
内外鮮整なるも結を以て横に縫ふ状の如
し因て魚の名なるべしと北魚味美なり且つ
腥し記紀湖にもあり為又芽等
小魚の所ヤツメと云へり公くなる事あると来りて常つ
て口に出ることなり、今皇和魚譜を見るに、北魚

後方四尺四方の石庵ありて、北の面氣孔七あり、目
とを会せて八ツ目とする。八目あるは、やつ
めうなぎとする。此石は、嘗は城後の山カジカ
と云ふ。金澤にもゴリと稱し、可笑かと思ひ居
りしに異なるより、遂に湯を沸かすことを得たり。
べて脳上のヒレ二ツ並附のこと、カジカと等しく
一つとして用きのゴリとかの又ゴリの石伏の名あ
んも、当なり。ゴリハ泥川にすむ。滝しゆるしへ
石伏魚の名ハカジカの名とすべしと云へり
○靈墓石を畫しる巨幅を齎らし来ること、留め
て書家に掲げ日々相親しむ。答来りて云へ、此所の
こと何の趣かあると、余所のものを云へ、造化の奇巧何んぞ

標原製

趣きと云ふを得んや。余実の天性石を素ぶ癖あり、為
す所の玩石十数箱珠玉、石印まあるもの土上にあるを数の
国中亦巨石七八あり、庭に、或日、義を用ひる所、石を討め。幅を脱して一祥
を使まるもの、ゆゑ、為景山の頂巨石群を為す、
在るもの、ゆゑ、遂に人も花も嘉こも)ひなるもの宮
城奥深く禁園の羅列の太湖石と云ふ。支那の太湖
石を愛する国なれば、在るもの多くあるべし、多くハ
斧痕を施し、セメントを加へ小石を重畳して
巨石の形を為す。滑々さんとう、一例を本んハ李
鴻章天津の舊邸の石のごときハ安の七細工を尽くす迄
なり、之れを日本我邦の如き比する倫敦(高山後楽園の

巨岩の如し、辛いて運搬し、原形を継き合はせたるものなり、
[illegible]山の小さんなるものは尺寸の美徳を賞する遊戯[illegible]人工
固と人工を誇り賞するの傾位なりとの如き如斯き巨石を原形
の儘移すは容易のことなるべけれども、辛苦して運搬([illegible])
[illegible]重の徳と称し焼めり、支那人の見るものは左まで巨石を
あるべきもしも[illegible]人工加はり、完璧のみ甚だ稀し、唯れ
禁園[illegible]見るべきもの五七の太湖石は完璧[illegible]を形貌変
態孔窟一見非難を納るの餘地なく、初めて太湖石の
上乗なるものを見て、今も忘るゝ能はず、何人も唐書に
太湖石を見ることなんぞ、[illegible]書の如きものは、帝室の[illegible]
[illegible]の[illegible]禁園[illegible]園なるべきものは見難きもの
と感じ、[illegible]他に比較する者なきものは、宮城内の一室の天

複原製

子の壁畫のマーブルの等身坐像と共庭の置かれたる
ものの盤ものの、[illegible]この盤は長方形なる一大盤にして
ある完璧なるもの、マーブルの坐像は裸体なるものいまだ
石を以て装飾さんの[illegible]艶治目を奪ふものなり支那は
[illegible]形俗と趣味を異にす孔窟なる石を畳み加へし
石穴庭の如きものを二庭に置くの風あり、宮庭内にもこれ
あるを見しが、これは人工を成すものなれ我は情知らず
と趣[illegible]内の如く錯綜の道に人を迷はしめることき
[illegible]向なり、何人とあるも支那は石の国にあるを後ろ
見るものは石の工芸美術なるべし。別に愛の置碑のあ
はるも野蛮なり、宮殿の陽面あり獅子の彫刻、更に小な
るものの刻するは視牧印材玉器等なる稚拙のものきと

美材を富むと雖ども宮内の冠たるものなし。随って
古来文雅で石を愛ぶ人の多い。
しるべし。文人の石を愛する手始め
印を玩ぶ。此の小品を愛玩することがやがて大なる
ものの反ぶ。と解してもよかろう。
石を称する流しも有名だが、東坡も亦負けぬ程である。
偶々来坡の書文を読み、彼んこう石癖の揮洒若干
を得たりまま一住流の傳のべきものがある。今其の大意
を掲ず。齊あの河の往々美石を得る、其の玉の如
くして黄白相雑るの色である。人の指上の螺の如き紋
がある。物の愛すべきものがある。齊あの山間い河

榛原製

の浴した時々拾ってみるのを見れば、第子たちもやって、文換
したのが積って二万九千八百の達したのである。大なるものは一寸
七分ばかりもある。果果の如くである。中に虎斑の
形のものがあって口鼻眼も具わっているのが最も貴
重である。之れを古銅盤の感ずるものと称する。
としても劣る故がある。ある時廬山の仏印禅師から
使が来たのに、何も劣るものが無いので、此石を使に
附して供とした。その時東坡の中途で行かれた
白い

使自今以往、山傍野人、欲供給者、
不限飲食所具者、皆得以清石為供蓋
自義子藤始

石を以て布施とすることゝ東坡自ら云へる事実なり東坡らも始まる、貧乏人が何も布施の供物のなきを
うれひ人々北の石こゝを注がして布施を易いしめよといふ思ひつきなりである。北の揮法は元豊五年五月
東坡の黄州のみに時なる書いた「怪石供」とある文なる、石癖の浅柄なりしも明らかに奥味のあるものなれば
何故か此話は殆り人口にのぼる。

○蘇長公の小品文を読み、特に尺牘の妙を感ずる。
頼山陽の書簡○などいふ東坡と私淑したみることが
歴然たるやうに思ふ。高しし東坡を似せるだけ
の才のあることを知れば、山陽を認めねばならぬ。蘇氏
の文を読むにも限られ、而して山陽のみを東

坡に倣ひ得ないのは矢張才を欠くが故ひあらう。
左の二三の東坡の小品も摘録する。山陽の書簡
もこれ等の数篇のみ少くもある。

題王文甫

昨日大風、欲出而不可、今日無風可出、而我意欲
留、文甫欲我出者、嘗使風雨與我意合、如此
便當作留客詩、

與陳天倪

白居易新岳成、嘗從天倪求數色果木、大大
則難活、太小則夫人不能待、當酌中者、又須土
磽稍大、不復根者為佳、不深言之、

與米元章

其昨日啖冷麦過度、夜暴下、且後疲甚、食黄
茂衛甚美、臥閑四郎、寄古、失病所生、明日
會食、乞且留、需稍健或而出、偖然時也、印
印納、
昨夜来りて示す伊氣なる所作を乞ふ又
二句を示す
谷言上人
去歳吳興、倉卒為別、至今耿々、遣屋窮陋
往来遠断書、遠辱不遺、尺書見及、感怖殊
深、比日活體佳勝、札翰念粘、徒待光彩是
不蒙見示、何也、雪南清境、発於夢想、此間但
有荒山大江、偖竹古木、每飲村酒、醉後曳杖

榛原製

放脚、不知遠近、亦勝於天真、無武林舊社
未見優劣也、何時會合一笑、惟望自愛
典毛維瞻
歳行盡矣、風雨凄然、紙被炉屋燈火青熒
時放社間、得少佳趣、無繁持獻、獨享為
愧、想當一笑也、
之んをおもふの日二月廿五日十一時、天寒く雪花霏々花
ふ寒甚し、淮南を煖め酒を飲み暖を取る、酒
甚醇、多く下物を要せざる也、一杯を飲け蘇公の
一文を淡む、殊に風味を覚ゆ、
ハ彼人が冥々の間、湯を沸かし滿盃すれば
人を乱さんと欲すれば、
珠と蓉李瑞叔一書
清恵を給く情愛の厚
今前半を取し

後生を勉む

載山年時、淺之進文、壽齢廿年而已、既及進士第、會得不已、又年制策、其實何不可、而只科舉為直言極諫、無益於補政、古今考人論是非以應其名耳、人苦不自知、既以此得、因以為實、以誘之、故淺之等、唯此得罪、死不瞑目、雪以口舌得官、真一の笑也、然世人多以載為非立異自負、則吳、妄論利害、挽之、得失、此亦利人習氣、譬之候者時鳥、自鳴自已、何足為損益、載每經時人待載過重、而是之又復科說、金、能其實、得罪以來、注自閉塞、斥棄草廢、放浪山水、與世絶跡、惟為

榛原製

衍人不推量、輒自ま、漸不為人識、平生氣力無一字果決有書無一之、亦不交、自幸庶或免矣、思之、又復創相推、甚凡不凡、未有應、石有軍、屋有道、以取妍於人、時勢之為也、詩多無事、默自親、四祝三十年以來、用為為、文其為言、是以不能時故、我所今我也、無乃少文為、不考其情、而其事而遂文實中、抑特又有之於此也、如予所見不能著、自得罪後、不敢以文字、也書雖如文、然信書、書之、不受四恨、亦不須示人、之愉也、嘗、行書、實其、惟為之節、哀強

不次

東坡翁の心事如何を知らんと欲するに、孫子立言極諫の深意を窺ふべき事疑なきかと思はる。而来年東坡の祥忌の生涯を思ふに、北海の事実は未だ東坡の北海の後世の感言と為すべきか、二月廿日 砂女

○明治保元年と一変を得て始めて「楽亭聖典解説」を海保氏の命により著し、首に子音自然の音声紙の和文自序のある冊子也

さて東京市美音会の事を終りて自分の如きことなり、海保氏の説の事を終りて美音会の事を終りて自分も如何なることかと知れかつ

榛原製

はゝ市の美音会楽会の設立に伝るのまなびとなりのべ次第なり、来年毎年二月十三日を以て楽会の為の紀念を制き、其折は聖典を載せ、楽会を賛成せしめ、亦美の遺詩を採り、亦美の遺文を収録して関係者の便つを例とせれと云ふ事実なり。日本橋区市中に七分積金の制度を設けたことがあるを云ふの時、芸術の為に府の引渡さえ、その中の一新に美音会が設立さんとの願を仰くの趣を聞き、海保氏は美音会の味から美音会を設立せんの人なりつとかい

西鶴伝の記念すべき日の出版物を初めとし、書
の清新なる、昭和四年五月のしるべあるが、子爵の序
文に記したる大正十五年、むらさき鳥と出版
したことが見えてゐる。これが清新なる雲華堂書の志
而して浮世草子が刻されたる史実に基づき自身
の解文を自著の後に刻したのを知ることを得た。
を所謂一書ひあるの無かりしかめる片鱗から志新
を含めたるもの、海保子爵が養子に関係して
おられたことである。貴今は海保子のことを徳川侯爵の
とされたるべきか、西鶴の志を悔めもしまれて大限定
ゆゑ自ら比さんとしたことを大限度のときに人で
あることを思ひ、書てゐる。特住の時をの白門

榛原製

出うけた演技をしたる、貴の別紙又国侯がある
で楽屋の楽屋の数を知ることを示した
あるが、鈴木重春のしたる拉の一巻、自筆稿本で
詳細した侯を敬慕するものである。　二月廿考記

○於伝サンパン　二月節に浮村寅二郎が演奏の
夜、浅草の演劇の沖の演を那覇に出ることは此冊子
又、芸全文を記して置いたが、此の一件は聞き
出来ず、次第に後で、沖の演の故元なる早大生
版新　演奏を新しく加へたるもの、と考へ、先つ演劇
倫敦側から、沖縄要使が浮村に先て吉牧に質
問を試みた所、案の浦泊である)使が来た。笑を作ること
全く自家の空想を以て吉牧に根據がある

深く悔いるの。今は自分も悔悟して居る、自分も実は河内
の全部を誠実と信ずる者があるやうに附け加へたさいつ
て見ると為すべきものであるが、此先白を信ず
と自分する河内を得する者があるから、先づ先輩の
を悪しきまねこき郷し自家の為めに地を売るのと
云ふことを警る。必竟文学の潜在猿城が斯る悪様
の洲毀を為さしめたるものだ。文学者を称するから
敗徳だが、実は甚だ浅慮の嫉妬で随分笑ふの価
値のものである。何がさんざんも公刊の発行、左も事実な
しく書いたるを、彼人を悔悟しうるを為す為
がなく、河井をセークスピヤ場合の富豪富士、一切の
事を挙げて堀込む為と、富豪も果めて、河井の言

標原製

あることを全部日表を表し、浮村と彩浪の場合を今
人なることを流し、依て河井は浮村と合
えし、統合能む河羅の自重を立すこと、東京朝日紙
上に顔末を掲げさること、浮村はセークスピヤ場合の
毒虫であるから、毒虫を解することの三個条
を提起し大体浮村の主人を読ましたりが付いた
から、出版部の称讃は見合すことにした。如何
馬鹿げたことである
○忠烈鬼神を泣かしむとは仮名の後辞があるが、事実この
後辞を使まるものは無い、爆弾を抱いて丸と共に粉微さ
こうるは、こんど真個の玉砕で、既往の義史に徐為し
例のないことだ。世界が驚くときの日を待つて此の称号の

世界を感動させた
三勇士最期の詳報
たれか涙なしに讀み得る？
悲壯、忠烈の極！

【上海にて新宮特派員二十五日發】 眞の肉彈——身體を爆破に敵の鐵條網を爆破した久留米工兵第四〇隊北川曹、江下武次、作江衛之助三兵士の壯烈な戰死は、戰場の華として戰線に喧傳され、福田〇團長は特に感激を奥へ（武人全高の名譽とうたはれてゐる、忙しい戰場のことではあるが、余りに壯烈なこの最期に福田〇團長は部下に命じて詳細取調をした結果、二十五日午前九時までに左の如き狀況が明らかとなった

我右翼が攻撃してゐた應援隊は戰線に出でとうとしても早くとる必要があり、もつとも重視された敵の陣地であつた、ところが敵はこの付近一帶に頑強な防備を施し、クリークを利用し、幅四メートルの鐵條網を張りめぐらしその後に夫なんがいを有する立派なざんがうをうゝくと機銃にもめぐらし、これに濃密な火線を布いてゐた、この方面の攻撃を擔任した〇〇團は廿二日午前五時半一せいに攻撃を開始したがこれに先立つこと十分、この突撃隊が尖兵となつて突撃路を作る任務を帶びた東高〇隊（指揮官中尉）田中東吉）の第一破壊班十名が三組に分れて出撃、まゝ明けきらぬ暗に敵の眼をくらますため煙幕を展張して敵の鐵條網に忍び寄つた、恐ゝ不幸にして敵のピストルの所在を發見され射撃を浴び決死の勇士はばたばた倒れ不成功に終つたのでこゝ

じた、班長内田伍長は爆薬筒を鐵條網中に運んで敵ぬことを覺り、班員と身を以て爆破を誓ひそれ上えかかる陰暦十七日の殘月を浴び、二組に分れ出撃し

で地雷、敵彈のため傷殺しないやう身體でおほひつゝ、鐵條網に近づい

ふところで敵の發見するところとなり、

朝日案内

種別　一件一回　三回以上一回
十五行　十六圓　十五圓
十行　十圓　九圓五十錢
五行　五圓　四圓七十錢
三行　二圓五十錢　二圓四十錢
求職　一圓二十錢　一圓二十錢

▼▼▼広告料は五十錢増特殊の地方版に限り一部分掲載されぬ事あり豫めご了承……

朝日案内専用電話　内丸一五五番

雇入

ミシン掛　既製子供學生官服裁縫職男女數十人急用要雇保西巣鴨宮仲二八五二東昌會授産場

女子　大募集毛糸編もの家庭内職來談あれ照會要三錢本郷區菊坂町四七　中澤製作所

苦學　生補欠採用通學許す學費充車飯田橋分牛込區須賀士八幡町廿一電下車八幡宮裏●研誠學寮

社員　手當給料要證人面會本日午後蒲吉原十手通シンガーミシン會社

看護婦　派出大多忙人會即時必ず下谷金杉下町一〇五ノ十一山本看護婦會電京六〇四四

看護婦　派出大本忙人會即時必ず本郷區駒込蓬莱町一〇五多忙全急募集　電小五六四七

女事　務員急募十八歳以上京橋木挽町二の一山田ビル明電社

女店員　甘歳ゞ廿五歳ゞ後四時迄本人來談淺草西三筋町卅四ミトセ化粧品店

滿蒙の天地に活躍希望者の爲よき手引有詳細要貳錢要返會大連市大黒町六七　滿蒙會

仕事　誰にも自宅にて出來る壁紙加工内職有り見本進呈下ゞ仲御徒町一ノ二六　東越商會

店員募集　廿歳前後身元確實保証玉川電三宿下車　朝日新聞直配所

配達員募集　金員保証要保證人金年後面談大森郵便局前入　朝日新聞專賣所

配達員　至急募集心身共に剛健にして保證人有者吾妻橋脇白髪下車隅田一三五一　朝日新聞店

配達員募集身元確實永續出來者野毛原橋丁　朝日新聞中野直配所

配達員十八歳迄永續出來る苦學者下車鼻地通一市電青山三丁目　朝日新聞直配所

求職

帝大各學部各家庭教師編輯等に適任學生課共濟事業係

被雇　度請資社會記務通心身健保有十二藤記務通心身健保有芝區白金猿町六いさみ方　米山

校正　英獨佛の校正係又は出版組輯の被雇度給不望　桃井巣鴨可宮仲二三〇一

貸借間

求間　無同宿八又八の新築日常良杉並町高圓寺七四一　常方學生春田方大平

求間　省電中野荻窪間又は大森附京橋區銀座西二階常方柳事局員森石

求間　大森大井の山手方面室珠光通風よき室を求む　大熊

求室　明閑静な六〇又八疊中央沿麹町區有楽町松竹パ前〇乞略端玉川

美室を求む知人醫學士帝大近く本郷　静同宿無き良家を　帝大醫學部　高杉

貸間　大森驛五分静で綺麗な高尚　同所附六四半御通意大森馬込町谷中一二七（八幡坂下）區田

貸間　六疊四疊半日常良閑静美室四谷區花園町五分新宿驛五分所付山田

貸間　芝公園脇八疊庭あり極静橋付に勤人か學生に御貸致したし麻布飯倉四の四　木田

貸間

譲喫茶カフェ　早大グランド坂上事情為破格　口二半奥五雖美設完下戸塚三五四池田

譲料理　中居敗出驛前絶好目下盛業何れにても良面談上電話都合上高三七三

譲小工場　電動力其他器械一式付前賃格安東大久保五三三家主富士

譲喫茶店　ビス湯樋目拔場所急賣本所石原町三ノ卅二ツバサ

売買

集金係　會計係　ーコー

簡易保險　他借居方一日も早借替を巣鴨下車四の一六　日本橋南茅場町四〇　中外横明治屋

簡易保險　御相談商時立替前御徒蓄上も可御徒蓄失効其他

廿圓　確實な勤人◇奥様◇學生一ヶ月放送局自動車登り口　丸福芝愛宕町

家財　及機械類道具僅手經迅速に新宿驛前三好野横人　小松

オ勤人　ヘテガルにドコを安くス御用立一度御試乞新宿驛前入府立第五高女校裏門前　丸幸

オ勤の方へ信用でドコを低利谷下車宮益坂中程上通二ナシ一八中一

オ勤人　ヘスグ御用立滿資料藤谷

勤人

勤人　に限低利にて絶對秘密嚴守堂乃は非常業素人電高五二〇二番

勤人　秘密裏切貸芝園橋下車勞働本部横人ソヤ裏芝新瑞町廿八　叶澤

教師

教師　官公吏車人無手數料ドコ参私元教師素人早稲田局私園八號

スグ　印付参信用秘密誰にも貸す御婦人及學生にも夜八時迄櫻田本町飛行館裏　中塚

教授

ダンス　正規個人教授指回壹圓毎日午後一時ゞ九段ダンスホール

ダンス　教授一週間朝九時ゞ日本橋伊セ町十　正規教師數名擔任晋通料月間書呈

ジャパン　舞踊研究所

世界を感動させた
三勇士最期の詳報
たれか涙なしに讀み得る？
悲壯、忠烈の極！

【上海にて新宮特派員二十五日發】 敵の陣營——最後を覺悟に敵の鐵條網を破壊した久留米工兵第〇隊北川喪、江下武次、作江衛之助三兵士の壯烈な戰死は、戰場の華として戰線に傳傳され、福田〇團長話ぬ將兵はもちろん在留民に極度の感激を與へ武人至高の名譽とうたはれてゐる、忙しい戰場のことではあるが、余りに壯烈なこの最期に福田〇團長は部下に命じて詳細取調をした結果、二十五日午前九時までに左の如き欽況が判明した

我右翼が攻撃してゐた廟行鎮は戰略上どうしても早くとる必要があり、もつとも重視された敵の陣地であつた、ところが敵はこの付近一帶に頑強な防備を施し、クリークを利用し、幅四メートルの鐵條網を張りめぐらしその後に丈夫なえんがいを有する立派なさんかうをうゝと陣重にもめぐらし、これに濃密な火線を布いてゐた、この突撃隊が尖兵となつて突撃攻撃した〇〇隊は廿二日午前五時半一せいに攻撃を開始したがこれに先立つこと十分、この突撃隊が尖兵となつて突撃路を作る任務を帶びた東島〇隊長田東吾指揮の第二破壊班十名が三組に分れて出發、まだ明けきらぬ暗に敵の眼をくらますため煙幕を展張して敵の鐵條網に忍び寄つた、然し不幸にして敵前七十メートルの所で敵に發見され、猛射を浴び決死の勇士はばたばた倒れ不成功に終つたのでこの情況を見た東島〇隊長は時を移さず、躍然奮起した、班長内田伍長は爆薬筒を鐵條網中に運んで點火爆發せしめてゐては到底望みが達せられぬことを覺り、班員と身を以て爆破を誓ひそれとなく〇隊長と水筒の水杯を交はし、折柄消えかゝる陰暦十七日の殘月を浴び、二組に分れ出發した、幸ひに月が曇りだして敵の眼にもつかず、各自爆薬筒を腰手で抱き、敵陣のため爆破しないやう身構でおはひつゝ、鐵條網に近づいた、いよ〳〵鐵條網まで二十メートル余といふところで敵の發見するところとなり、猛射を受けたが二組とも怯まず突進、一組は濠際の鐵條網中に伏かけて辛うして接近した、北川、江下、作江一等兵等の組は爆薬筒を爆發せしむる暇がないのみならず、うつかりすると鐵條網まで行かぬうちにやられて目的を達せず終る恐れがあるので、三人とも身體とともに爆破するに決心し爆薬筒に點火し、これを胸に確かり抱いて驅だし、鐵條網の眞たゞ中に身を投げつけて、爆破壯烈無比な戰史上未だ聞かざる戰死をとげてしまつた、この三一等兵の忠死と他の一班の爆破で、さしも頑丈な敵鐵條網も廣さ十メートル程完全に破壊されて突撃路が廣まり、〇〇隊はこの道から突込んで瞬く間に廟行鎮東側陣地を占據、次いで廟行鎮にゐた敵軍の猛烈なる銃撃隊を追ひ、我全軍の作戰を有利ならしめた、眞先に突進して死傷した第一破壊班及び三等兵と共に爆破を極めた鐵條網破壊班の他の一班の忠勇も無論であるが、この三一等兵の忠誠は上海付近における最重のため苦に涙くまれぬ貴重なものであつた

工兵〇隊を訪ひ
三勇士の壯烈を聞く

【上海小湊小久保両特派員二十五日發】 壯烈な戰死を遂げて我が部隊の突撃を成功せしめた久留米工兵〇隊の三勇士がどんな輩々しい最期を遂げたか當時の模様を聞くべく二十五日れい明前敵軍砲撃北方の戰線を危殆を冒して進み廟行鎮方面北方一キロ余の家屋に待機中である工兵〇隊を訪ひ廟行鎮における鐵條網破壊の狀況を聞けば松下大尉大島東島両少尉は

「とても口では現せない、壮烈壯なものだつた」

と唇を噛して感慨無量な面持で語つてくれた

松下大尉談

あの決死的作業に從つた將兵は生死に拘らずいづれも最大の敬意を捧ふに價するが、壮烈した三人の兵は覺悟の上とはいひながら可哀相なことをした、二十一日午後五時麥家宅において與へられた中隊命令の要旨は左の如くであつた

一、〇隊はその主力を以て敵〇隊正面の敵陣地に突撃路を開かんとす

二、第一〇隊は森田〇隊正面の鐵條網を爆破し突撃路三條を開くべし

三、第二〇隊は敵〇隊正面の鐵條網に突撃路五條を開くべし

自分は午後六時決死の破壊隊を集めて訓示を與へ皆と別れの杯酒をくみ出發せしめた 第一決死隊は大島少尉が指揮する十四名で三班に分け第二決死隊は東島少尉が指揮する二十一名で第一次破壊班を三組に分け總員三十五名だつた

戰闘經過及び感想はこゝにゐる二人の決死隊員に聞いてくれ給へ

第一決死隊長　大島少尉談

森田〇隊が二十一日午後十時廟行鎮南方の敵前五百メートルまで迫り突撃陣地を築いた我が決死隊は約三十分遅れて〇隊にほふくして鐵について行つたが暗いため十メートル進むのに二十三分もかゝつた記憶をつくつたのは二十二日午前二時幸ひ曇りで月が顔を見せず午前五時頃にはもやが深く立ちこめて敵に迫るにはもつて來いの狀態だこの機を外さず自分は皆に前進を命じた森田少佐は先頭に立つて重刀を打ち振りつゝ走るのが見える、あゝ我等は立派に任務を仕遂げたのだわけもなく涙が溢れる一時第二班が見えなくなつたのは後で聞いて見ると外の班の爆破で全部土に埋つた、てつきり死んだものと思つたが頭をもたげるとまだ生きて居るといふ意識がかすめた直ぐに土をかき分けて導火に點火したのださうだ

眞先に高喊を叫ぶ我々も有らん限りの聲でこれに和した間髪を容れず歩兵部隊は大かん聲を擧げて突撃して行く森田少佐は先頭に立つて重刀を打ち振りつゝ走るのが見える、あゝ我等は立派に任務を仕遂げたのだわけもなく涙が溢れる一時第二班が見えなくなつたのは後で聞いて見ると外の班の爆破で全部土に埋つた、てつきり死んだものと思つたが頭をもたげるとまだ生きて居るといふ意識がかすめた直ぐに土をかき分けて導火に點火したのださうだ

第二決死隊長　東島少尉談

第一班はひは傷つきあるひは倒れ、壯烈空しく座折するかと思はれたので豫備班に強行破壊を命じた、この時班長内田徳次伍長は破壊筒を鐵條網にさふんして點火するいとまなきを知り、鐵條網請兵粉碎されようと悲壯な覚悟の下に點火し、勇躍二班がさうと鐵條網に突入した、しかるに二つは辛うして退避したが作江、北川、江下の各一等兵はがう然たる音響とともに木葉微塵に粉砕され、跡形もなくなつて終つた、この勇ましい最期には流石の九州男子もが、然と目を見張つて言葉もなかつた、なほこの時島田軍曹は負傷したが敵の機關銃目がけて手りゅう弾を投ずるためにまづ自分の體かぶとに打つけ發火せしめ一、二發も投げつけて、敵が逃出すに乘じ鐵條網に飛込んで、はさみで一條の突撃路を單身で切開いた、實にあ餘程王そのまゝの姿であつた

外國記者はかく見る
日本精神の極致
「死に對する敢然たる態度」を
タイムスのバイアス氏激賞

この三勇士の行動が外人記者の目にどう映つたかニューヨーク・タイムス及びロンドン・タイムス東京特派員ヒュー・バイアス氏「余は日本軍隊のいはゆる比類の無い精神性といふものを具體的にいつて見るならば「死に對する敢然たる態度」にあるといひ得ると思ふ、これはいひ換へれば生に對する無執着とも解釋出來るのであるがこの

國民　的精神性はまた「生命の道を全う」得ない場合にはいはゆるせつぱつまつた自殺に等しい行爲となつて表はれる場合がよくあるのである、けれ

思ふ　この三勇士にまつはる話こそ、日本軍人の死に對する觀念の良き模範として後世に永く傳されるであらう」

「死の途をとつたものであると

日本軍人は
訓練された魂だ
米國ハースト系新聞日本支配人　ヤング氏談

アメリカ・ハースト系新聞日本支配人ジェームス・ヤング氏

「今回の上海における日支衝突でもつとも壯烈聞く人をして涙ぐましむるものは人間の手りう弾となつて敵の鐵條網の中に突入する悲壯な最期を遂げた三勇士に關する

報道　であらう、余は三勇士の行爲を、小說や世界大戰記に出てくるそれと同一視したくは無い、我々外國人は常に聴く所であるが日本軍人は武器を持ちカーキ色の軍服をつけた單なる人間では無く、永年の軍隊的訓練を受け天皇陛下直に皇室に對する尊敬の念極めて厚く如何なる困難に遭遇しても「吾行く」の獻身的精神に燃えてゐると云ふことを知つてゐる、こんどの三勇士もこの精神を

如實　に具現したものであつて、これこそ日本軍隊の攻撃力に指導を入れたものであると思ふ」

正に英雄
シカゴ・デイリー・ニュース紙ブラウン氏談

シカゴ・デイリー・ニュース紙東京特派員ドン・ブラウン氏

「廟行鎮決死隊三勇士の豪勇果敢な行爲について無批判な第三者は、如何に壮烈をほこる鐵條網であらうと白刃か又は飛行機上から爆彈を投下したら、破壊も難作も無いではないかといふ、それも一理はあらう、けれども若しあの場合かゝる方法をとることが許されなかつたとしたならば彼等の行爲は當然英雄のそれに價すべく、然もこれこそ日本が持つ犠牲的精神の極致であらう、一般外國人として日本兵士の勇氣を疑ふ者は無い」

【寫眞は上＝バイアス氏、中＝ヤング氏、下＝ブラウン氏】

牡丹を祝、紀兵士衛四の精神に感動して、なるべく偶然
なるべし。

○東坡の品文中、書畫石に寄する一文、前掲石の一部の
補材とすべしとの文如左

靈壁出石、然多一面、劉氏園中、御書堂下、有一株、
獨峙、然又震、作麋鹿充欲狀、東坡居士欲得之、乃畫
蹤華閣壁、作醜石以供、主人
書、乃以遺之、後、癸未載、歸陽羨、次、元豐八年

四月六日

○昨日雪、今終日霽、を擁して家居偶々畫冊を售
りに来るあり、長崎の三浦、紀州の掛の畫を係る
首部に蘭竹數枚あり、漸やく蓮蕉に入る、牡丹

橋原製

あり、蓮蕉あり、蘆一人あり、海老あり、柳蔭に鵜あり、
簡あり、芭蕉あり、一人朱紅に鳥あり、山水二枚あり、
蔬菜並鳥、皆南畫の特徴を得て意味深長なり、
余畫帖の中折を忘れ、抵掌賺ハさんとし、鄭重に食指動
き、架中のものとす、冊屏の識語に丁未初夏寫
摹古二十葉、以呈海鄭大人、清賞とあり、亦一七北の
畫冊十八枚を取り、二枚を送る、之れを遺墨とす
す、弘和七年二月二十六日記

○東坡が佛印禪師に布施として石を寄せ比祝しが面
白いのと、前掲石の文の内に収め、更に東坡の品
文を漢出と、後怪石供」と京一文の長き氣が付い
ぬ、氣と伝ふと佛印禪師の生涯の中一大事つ比ことが

面白いと感じて、其の言を諸石に刻したとある。笑を
以て東坡に大いに笑つた、全体あの石は菓子を上記
著名の菓子屋で、石と換へたものである。蓋し佛印の菓
子を貰つて、佛印は恐らく刻することを肯さる
いでなからうと云ふて、行を説いて佛印を揶揄し
更に石二箇五十文二個の石槃を寄せたと書い
てあるが、行の説きぶりが面白い、佛印も石を愛
することを惜む東坡の逸流があつたと見へる、左に
其の全文を収録する

後怪石供

蘇子瞻以怪石供佛印、佛印以其言刻諸石、蘇子
聞而笑曰、是安所從来哉、余以餅易諸石、兒

標原製

者也、以一の食易無用、予既逆笑矣、後又從而
刻之、今以餅供佛印、佛印必不刻也、石與餅何
異、琴寥子曰、然、供者行也、受者亦行也、刻其
言者、亦行也、夫行何適而不可、拳子而示蘇
子曰、拱此而揖人、人莫不怒、曰是子也、而喜如昊、世未有泯之者也、
子誠知拱戟之皆行、則喜雖存而根亡、刻其
與不刻、無不一の者、蘇子大笑曰、子觀之耶、乃
亦以供之、凡二石五十、并二石槃云

蘇東坡の人が線を淡す、北文たるを行を説く、
線を玩ぶの一端をもつて明らかにす、前掲石の文は追録
補まい

二月廿六日記

○石ぬで思ひ出すことがある。角合の方年の頃、夏のころと曾祖母の隠宅へ多くの小石を盆に盛り、美しく飾りを注いで、床に置き、涼味を深くするものとした。此の小石こを曾祖母が良人の義と上方笑うをして木綿に巡いての長話に、角石をとる方々の小石を拾ひ取つて来ひとるべ、すこぶる満ひ、美麗な石がそなつた。角合海濱から主れ取つたもの。それであらう。その石は一々朱漆で地名が記されてあつたが、曾祖母まへ石をくるる思ひ出すあつて、おくいろくの話をしかさんれことがある。いつもその話のある都、名和田、今が冬考の巻めて示さんと、角合は早くから名所図会に説味とかいたもの。今は北書の石は何れも失せたかもしれが、旅

標原製

りの紀念に石を拾ふを他の思ひ出の物を供まるとハよりの思ひのきが、今でも旅の者に勧めてもらいこと。思ふ、話は変るが角合は曾つて、封建時代の古々の城々の一石を取り集めて、美なる城名を刻し、大建築の材料を供し、封建時代の紀念とするに面白からうと云ふことがある。当時誰れうの話しで、下谷表の薬のやうなものがある。それは表面上の為の高い夜燈の巻えいろくの石が用へられたこそ方々の城の石を集めたのとせうがあれこそ方々の城の石を表し、もと右側にあつたのが左側に移されたが、矢張り同じ石を以てもとのまくる築かれたのは表いしいる。

●二月廿六日記

○石に就て常に思ひ出ることあり。蓋し海辺の方にて
浪の折二三所の松を歩廊の面白く石に細工されたる
のを見たり。土色さまざまの小石を集めて、或は草の
さく、或は鳥獣のごとく、光から書したる色彩を照
しかえんことく細工されたり。えハ鏡スティン
ドグラスのぬき味のよ[illegible]、西洋渡来の技味とあ
らうと思つた。石ハ皆小顆であるのに、面白さらさんと
も地しも動かず、チャンと其の後面を保つてゐるのハ
セメントで固めてある故であらうか、西洋ハ地般の
歩廊がある外未だ詳べたこともないが、いやけたるべ
婦人などの表心なるかをいうものが男子の面のごとしと。
洋館などの調和するの調和するがあるべきが、支那でもいのい、

標原製

洋館附属ハそうなれば。
古時を訪ひし時ハ石材の量産をそうく注意を惹へ
たる。其家の人の語る古時の地盤ハすべて巨石であ
ると。されハ家屋を築造するに、地盤を固めるを安全が
主ハのようなれ、石材を産出する地方ハ、石造の家屋
を必ずことも容易ひ結構の美なり。自分の
訪ひし頃ハ、獨乙が退却した後ひ、獨乙の住宅、保
護公私の家が方々にあつた。現に獨乙の給養の四
名を招ぎ入れて其の家屋を築くの[illegible]、獨乙人が石材
を以て巧みに家を築くの[illegible]感服した。どの家
を見ても、スレートが時に異つてゐた。官署ハ官署相
応に停車場ハ停車場相応に私邸ハ私邸と系統相

こ表面が滑さん、ずっと以前の表面があると思ひます。
石材を使用するものもあるが、ラフの面
をそのまゝ露はして珊瑚の骨を有き印つてゐるが
味を深くしてゐるものもあつた。素朴あるいはあ
るらしいが建築の内の別屋日本などの及ぶ所
でないと感じた。
日本でハ彩陶の產地を甲州としてゐるが日外学べと
話しでハ甲州の彩陶ハ既に絶へて、今甲州でハ二ーとゐ
るのハ、アマゾニアの產地ばかりで、質が果して日本のと
同様であるかどうか未だ調べたことハないが、自分ハ日本產
の彩陶を好きまうへハ自分の產物と考へる。日
本のハ古くから遠路の墨りがあり美麗七上をへが

榛原製

どうも彩り奇麗でがうたと似通つてゐるこのが、氣を付ハ
ぬ。それのもとなる。簞も又硝子の如しゐて、印度の船
るとおりなくして彩ハり氣が全ばるハ。篆刻材として
比較をすると、日本のハ印鑑かれ下品である。支那のハ
高級品を缺きど人らも墨りがある。乙てを侍龍を缺
くが、日篆刻の資えるる材料ありがあつても、日本彩陶品
のやうなりでハ極るることがるハ。高級品のみ品もまたんび
ゐるものハ彩陶と氣とを兼ねるものと思ふ。

東京朝日新聞 大正十一年二月十九日

坪内博士の「名譽のために」

「沙翁全集」に關する事件

【上】

河竹繁俊

「沙翁全集」譯四十卷は坪内逍遙博士が前後三十余年間を費し、全く單獨の努力によつて完成されたものである事は、單に早稻田大學で同博士の沙翁講義を聽いた者が周知してゐるばかりでなく、多分世上にも傳聞されてゐるであらう。然るに、最近に至り、右の全集は同博士の手に成つたものではなく、ほとんどことごと他人の稿を利用したものである由を暗示した、不思議な一文がある雜誌上に發表され、學界及び文壇の一問題となならうとした。

×

萬一にもこの暗示が事實とすると、坪内博士は他の功勞をかすめ奪つて、多年の間虛名を學界に博してゐた、至つて卑劣な學者だといふ事になるから、第一には、四十余年來同博士を元老とも名譽教授とも優待して來てゐた早稻田學園の不名譽であり、第二には同博士を記念するために創立された演劇博物館の不名譽であり、第三には同館の創立に際して十八萬圓余を寄贈すべく申込まれた一千何百名の人々の不名譽ともなる次第である。更に大きやうにいへば、わが英文學壇全般の一醜辱であるともいへる。

×

が、いふまでもなく、右は、少の影さへもない、全然無根の事實であつたのだから、問題は自分と筆者との唯一回の會見によつて、跡形もなく解消したのである。とはいへ、前記の暗示的中傷は右の雜誌によつて、もう既に、相當に廣く傳はつてゐるかも知れず、國つて件のぶちう中傷が案外に長く讀賣せられないとも限らない。で、お需めに任せ、單直に事の顚末だけをお話しすることにしませう。

×

自分が坪内博士から、第一書房發行の雜誌「セルパン」の二月號をハガキと共に讀取つたのは本月の九日であつた。「この雜誌中の「寒雨の夜」といふ小說體の一文を讀んで見ろ。但し一言の弁駁などする必要はないが」といふ事を書き添へられたハガキであつた。早速讀んで見ると、四ページ足らずの小品で、筆者は東京高等學校の首席教授兼帝大助教授の澤村寅二郎氏である。それは一人稱體の小說といへば隨筆といへば小說、隨筆といへば隨筆のやうなもので、その大意はかうである。

×

銀座裏の、その道の通人には「あゝ、あすこか」と直ぐ解る、上品なカフエへ僕と自稱する男が往つて飲んでゐて、ふとある老人と知り合ひになり、その老人から「どうぞ祕密にして下さい」といふ前置きの下に、T大學の名譽教授S博士が二十余年を費して譯した××全集四十卷には、右の老人が落はくの結果S博士から多少の扶助を受け、その禮心で譯したものである事を聽取するといふ筋である。S博士は右の老人と同窓であつたとして、S博士は講義や講演は中中旨いが、×語はちつとも本當には讀めず、語學は元からカンがわるい男、しかし記憶は強く、努力家であり、又書籍を集める事は上手、但し生中右の老人の譯に所々筆をいれたのは、敬慕に過ぎなかつた。さて、緣の下の力持ちで出來た譯であつたにも拘らず、右の××の飜譯はS博士の一生がいの大事業であると海外にまで傳へられ、日本×文學界の名譽譽と定評され、いや、世界の學界に、たとひ不朽といかないまでも、永く記憶されるであらう、うんぬん。以上、要點だけを取まとめたのだが、同じ伏せ字が處々に使つてあり、S博士、名譽教授といふ事も繰返してあるから、だれが見ても、それは坪内博士の事としか思へないのである。

×

自分と坪内博士とは師弟の關係である。これを讀んだ時の自分の憤慨は、さういふ私情からではなく、わが學藝界に對してのひ毀中傷であると感じての公憤であつた、思ふに、博士の沙翁譯にも、嚴密に批判したら、種々の欠點はあるだらう。だから、その欠點を指摘するのなら、如何にそれがしゆん烈であつても、それは決して中傷とはいへない。けれども、明々白々たる生きた事實――いやしくも博士の講義を聞いた者の一人として、あの譯が博士獨特であることを疑はない――をひ曲して然も暗示的に、いざとなればいひ拔けられるやうに、小說體に書いたといふ事は奇怪千萬である。少くも博士記念の演劇博物館を預かつてゐる一人として、このまゝにしてはおかれないと思つた。

坪内博士の「名譽の

「沙翁全集

【下】

そこで、本月の十四日になつて、私は澤村氏へあてゝ一書を送り、そもそもどういふ動機であゝいふ事を書かれたのであるかを問ひ合せた。内々、自分は、あるひは澤村氏は輕薄な學生などの浮いた風評か何かを傳聞して、博士の沙翁譯には手傳ひがあつたらしい、いや、あつたに相違ないといふやうな風に輕信して、いはゞ、誤つた一種の正義感から書かれたものではないかと、むしろ善意に解釋し、丁重な書面を以て一應問ひ合せて見たのであつた。

×

と翌十五日に、澤村氏から返事が來た、それによると、あれは全然空想から成つたもので、何等の種もモデルもない、自分は今「シーザー」一篇を譯了して近々發行させようとしてゐるが人間は三重人格におちいり易いから、將來どんな卑劣な心が起つて、他人に下譯をさせ、その功名を自分の物にするやうな事がないともいはれない。その委を一種の恐れと興味とを以て書いたのであるうんぬん――。

×

といふのであつた。が、筆者の主張せらるゝ動機如何に拘らず、結果において中傷的である事には變りはないのであり、それに、掲載された雜誌があまり廣く知られてゐない雜誌だけに、萬一このまゝに通過されてしまつたら、後世の學界までもこ惑する一怪資料となるかも知れない。古來、內外とも、文壇における中傷ひ毀の逸話も多いが、こんな奇怪な例がどこかにあつたらうか。軽々で以てする暗殺と評しても過言であるまいとまで感じた。で、とゝかくも一度親しく會談の上で態度を決する事とした。

×

しかし自分は、前にもいふ通り、この事件はあくまでも私情を離れ、公けの問題として取扱ひたいと考へたから、慎重と沈着とを第一とし、十七日に到り、帝大教授文學博士齋藤勇氏イクスピア協會の常任委員でもあるから、第三者としての批判を聽いて教へられたかつたので、澤村氏からは、別段の名譽教授S博士が二十余年を費して譯した××全集四十卷には、迷惑でもオブザーヴアーとして立會つて下さるやうに希望し、二十二日の午後四時、帝大の英文學研究室で澤村氏と會見する事にした。

×

ところが、その席上でのあの作の議論には、前日の返書以外の事あつたが、要するに、全然空想的であり、決して中傷する積りではなかつた旨を力說し、繰返されたのであつた。にも拘らず、あの一文が、その結果においては、正しく坪内博士譯沙翁全集の名譽を毀損するに至つたものであることを澤村氏も自認し、その及ぼした迷惑の重大なる事を意識された。さとして、ちう心より遺憾の意を明示するの方途に出でられたので、さゝに問題の解消を見たのであつた。

×

この顚末記を終るに際し自分は澤村氏が即座に率直に、右の態度に出でられた事を特記し、同時に齋藤博士の立會はれた事を深謝する。（二月二十六日）

榛原製

○常に伊大元の侍を張ゝ、茶の道に徹する、此文即ち禁也、余い常に此文を以て考前を論じ、一問も又一如一合無いとき、一生一代なるべくとを為ることが出来る、大切なる有り、一日、大改新の副記を上梓せんとを為の時茶室と称せる人の心、茶の道とは何ぞや、世の不明を敬術して一場の話とすることが出来る、茶室の形式に堅て、奥儀を極ら

主客とも餘情殘心を催し退出の挨拶を終れば客も露地を出づるに高聲に咄さず、靜にあと見かへり出で行けば、亭主は猶更のこと客の見えざるまでも見送るなり。扨中潜り猿戸その外障子など早々締立などいたすことは不興千萬、一日の饗應も無になることなれば、決して客の歸路見えずとも取片付け急ぐべからず。いかにも心靜に立戻り、此時にじゝ上りより這入り爐前に獨座して、今暫く御咄しも有るべきに、もはや何方まで可被參哉、今日一期一會濟みてふたゝび返らざることを觀念し、或は獨服をもいたすこと、是一會極意の習なり。此時寂寞として打語らふものとては釜一口のみにして外に物なし、誠に自得せざればいたりがたき境界なり。

——井伊宗觀——

"Beauty is the Sence of harmony in nature and necessariness."

榛原製

す、余の茶風の形式さる（ちゃんとする）奥儀を解す、余の今風の茶人なりとも、利休一系の茶人なりとも、茶人かこのこと

二月廿八日記

○上海事件の報道を三度士爆弾を抱いて鐵條網を破るの一挙は、既往の戰史を例るも悲壮の事なるも、中外を大ならしめるセンセーションを起してあり、爆弾投擲と共に身を粉砕して、何人をも其の壮烈なる、而して最も意義ある自殺とす、如くもさもしい吠吠犬鐵條網を焼り難く、他の方便を藉るの得策あるべく、自から犠牲となるを目的を達する最上の方便とする時は、一死を鴻毛よりも軽しとする人、軍人最も精神の偉大なる発揮なり、自殺の頗る意味あり、こん爆

榛原製

須の方を戦信するものは、人誰んか我伝の去るを、哀惜を切なるものあらん。殊の決死隊として雄々敢行するものは、唯だ死あるのみ、生来為一を僥倖せんや、日切に決死の士全部を帰すべく、甲乙を立て難しと雖も、僚友の為め殊に雄き志を遂げ、身を殺して僚友の為め道を開くこと、首切隊を作り帰すべき常道なれども、帰せざるを得ざるべし。

況や決死隊中特に三士を称揚するに、之れが故のみ、三士の死状の惨は骨肉脳膵飛散して一塊を止めず、之れを散華と云ふは當れり、其の犠牲精神の光を日月と争ふ、之れを玉砕と云ふは當れり、人性の名の為めに自殺するものあり、平等ハ之れを陋とす、三士何ん義人身後の名を顧みるに暇あらんや、近来の戦争唯だ機械をこれ頼む、心霊の機械を

起ぜしめ、奮起せしめんとする時、三士の壮挙は心霊の為め虹の如き気を吐きて、之れを起ぜしめ、方今情弱の極を呈し、人性に上利を起くるを急とし、廉恥を拂はんとす。廟堂も社会も及び一般の頽廃を免かるものなきも、ひとり陸海軍とは志気を存するは、国の為め賀せざるを得ず。二月末

○所謂公の唯だ利害を求めて、前途酒を飲して気の分勝れず、ケ様の時は義を忘れ、テツキガールの仲間ずいぶんと出る。用ゐて猥がましき仕かたを行く先は一向ま堂まる、漸やく三個のかうりゝ美の会社の除名の海軍の海軍のあることの思ひ高い先がうんをアテ

の刈り込み、美の回社といふものの因縁もあれど、絶て其の只人の心を見いたらず、浸元人ゴミの中を歩して、そんくるる一節を無くとなり、別る感することも無つた。の者つて街頭に出ると、出征軍人を祝するとて、トラックを多くの人を載せ、祝旗を押し立て高く叫んで過ぐ、當日自動車式台が多くこの後に続く。皆町旗を掛つ、如斯きこと二三ケ不こ見る、そこらの景氣くて戦争気分街上に漲る、然る後上帰人が白布を振く、路上の帰人を留め針と糸を貰つて、一下針縫のしてあるこの布、北の針縫のある布を別れて軍服に着け振る旗を受けずと云迷信は昔し無かつしことの如く思へる。ブラ〳〵して終る桜堂に到れば、こゝの植木

榛原製

の柳を植術設に植へつゝあるを見る、時さの如く、銀世の街樹に柳を化せんとする、桜堂の昔し常つて柳多く、人以つて桜堂の風致に柳の樹を植とする、不花柳を植へるを見るに遠元する也、モナミと云ふ家に就て紅茶一杯を喫す、紅茶を表するに多くの場合、シガレットの一本の煙草を表する西洋の艶語を名とする家多し、モナミはモン、アミの倒語なり、元貴人とは人を拉くすき者輩なり、茶を喫しながら獨笑す、汽船の市都空地下室の分店なる酒を飲る、桜堂の酒ちき、一骨董屋なり、小品古玩を通る、今の如くなんの面白味なく、但し

人物鈕の糸印、古色掬すべし。余か収蔵五十餘顆の同印
と併せ蔵すへき可なり。嵯峨人形如品三個古文跡
犬一双争ふの眺あり、共に購ひ入る。茲に初めて偶伴
を得たり。吾人既に酒に渇す。此等偶伴を坐に列して酒
に親まんか。但此時刻未た十一時に到らす。尚三十分
漫歩を要す。徒歩再ひ日本橋の袂に戻る。白木屋
に入りて晴を愛てたる者の得る所なし。即ち附近
の割烹堀留兵衛に入る。未た一客をも見す。乃ち
途中購ふ所の物品を食卓に陳列して酒を命して飲
む。余渇する時先つ麦酒一瓶を傾し而る後余の嗜好に従ひ
日本酒に及ふ。下物は本日鮮の魚を主とす。
等の座敷の鉄鐺とす。余侍坐の玩具と捌ふ。郷

等の何を食ふと非するなく皆黙を守る。前日新葉館の
日輝を催せし某君と酒食を共にせし時と甚た同しからす。
嗚呼皆玩弄の具、語けるは其の語するものを望み、土
偶は性情主人の語するに任す。玩弄物の語けるは終に
土偶に在かさるを覚ゆ。余乃ち二三種の下物を命す、
同く味噌の美、同くトロ鮪の鱠、これ吾か好む所、偶伴
に薦めんと欲する酒熱し、偶伴をポッケットに入れて
あり。昔し一古人、土偶を懐にして飲食の時必らす
之に置き、活人と話するか如く談笑楽しむもありしと
云ふ。余も亦之に似たるものあり。余此の遊話を知るも
自から之れを擬したることなし。今偶と之に倣ふ。初
めて遊境を識る。偶中の消息を知る。

二月廿九日録

○上海事件の惨憺たる結果を招致して聯盟に統合
開戦後今日迄の聯盟の処置は実に日時の経過
間を移さず、荒し日本聯盟を脱退するに及んで聯盟の
面目は全く潰る、聯盟なるものは三思を要す。国際都市
の周囲或キロの間事を支那がいつもく殊更ら
て訴うべきあるべく非常不法事を挑ひ依つて以つて
国際の紛争を招くべきこと、事敗えば租界を逃
外国の間接の援助を待ひんとし、事敗えば租界を逃
げ込んで命を全うするの卑怯なること、こんなむちゃく
あることとうとう列国の迷惑を来、北
京等や、列国共同して除かるるに至らざることとなり、今
回廿キロ撤退を日本の主張するもの実に北の禁を除

標原製

くるを待て、列国がこれ式の事を無責任一概に猫忘の日
を以て日本を見、非子義の愛揚を出人とするが
笑ふべき情況なることとうとう今やヤット日本の提議を同
意せんとする模様あるが、迂つて政むるを無様な
ものとすべき歟、最早支那も日本と戦ひ得ざる
者の退廃しれば、日本の提議を式は応ぜん為
応ぜずんば聯盟の之れを強制すべきも日本は支那
を物蔵するの意象あるが、聯盟は支那の御機嫌
を取つても和麦麦テコの態方を出人が聯盟統合
の目前に徹底的の打撃を加へんとす

二月廿九日

明治廿五年三月八日（第三種郵便物認可）

東京日日新聞

昭和七年二月二十九日（月曜日）

編輯兼印刷人 相馬高
發行人 大阪毎日新聞社東京支店
豐島區有楽町一丁目十一番地三號
東京日日新聞發行所

號外

我が重要提案で日支紛爭、俄然好轉

支那軍廿キロ撤退を條件に平和的解決策成る？

【ジュネーヴ廿八日發聯合】 聯盟特別總會の期日切迫と共に上海における事態を現狀のまゝ放任して總會に臨むことは國際政局上に重大なる結果を誘致すること最早掩ふべからざる模樣ありこの情勢を看取した聯盟主要國代表は早くも總會前に政治的解決を計らんとし躍起の運動を續けてゐるが日本代表部が廿七日理事國代表に傳達した重要通牒により局面は急角度をもつて一轉し上海事件は今や和平解決の機運に向ひつゝあるものと解される、この間に處して日本代表部の首腦松平、佐藤兩大使は連日の如く聯盟主要國代表と會見を續け折衝をとげ本日の如き日曜日にも拘らず松平大使は午後ヴォーリヴァーシュ・ホテルに英外相サイモン氏を訪問して長時間にわたり會見をとげ解決案を練つた、解決案は次の諸項を骨子とするものである

（一）上海における日支兩軍の停戰（一）日支兩軍の停戰後現地において國際圓卓會議を開き善後解決を計る（一）停戰條件として支那代表顏惠慶に對し支那軍の租界外廿キロ撤退を要求し日本側に對しても撤兵その他を求む

この解決案に對しては支那側も從來の頑迷なる態度を改め相當折れて來てをり日本代表部としても支那軍の租界外廿キロ撤退の要求が貫徹されれば異議を唱へる理由も自ら薄弱となるものと見られ日支双方の歩み寄りと現地と相呼應した英、米、佛三國の熱意ある斡旋とにより上海事件を中心とする緊張せる時局も漸次且つ合理的なる解決に近づきつゝあるものと見られる

各國代表の折衝頻り

【ジュネーヴ廿八日發聯合】 日本代表部が廿七日理事國各代表に手交した重要通牒の內容は絕對秘密に付されてゐるが上海事件の和平解決の端緒を開いたものなることは殆んど疑を容れず右に引續き本日は日曜日にも拘らず理事國各代表間には上海事件に關する意見の非公式交換が盛んに行はれてゐる明日は理事國十二ケ國會議が開かれるものと見られるがフランス首相タルジュ氏が明日パリから到著右會議に出席することゝならう、獨りジュネーヴにおいてのみならず極東殊に上海の現地とも盛んに打合が行はれてをり支那代表部だけは依然悲觀的見解を抱いてゐるが上海事件の和平解決はいよ〳〵好望となるに至つた模樣である

標原製

口繪解說

雪の山々　鎌倉時代　高階隆兼筆

本圖は帝室御物、春日權現靈驗繪卷中、風景描寫に於て最も美しい場面の一つである。絹本に胡粉、綠青、群青を主色として、春日山一帶の雪景色を描いたものであつて、清爽な雪の氣分を印象的に遺憾なく表現してゐる。この繪卷は鎌倉時代延慶二年三月に、藤氏の一門西園寺公衡等父子四人が敬神の志、懇切の餘り他筆を交へず全二十卷の詞畫を認めて春日明神の靈驗を禮讃したものでその繪は豫て西園寺家と緣故ある高階隆兼に描かしめた。隆兼は當時繪所預りであり、土佐派の名手として喧傳せられ、石山寺緣起を始め幾多の作をなしたと傳へられる。然し、確證あるは本卷を以て第一とする。而して隆兼がこの名譽ある依囑に對し如何に丹精を盡したかは全卷を通じて一線一色も苟もせざる愼重の構圖さては筆致賦彩にも窺はれる。而して西洋に於ては尙未だ獨立した風景畫が出現しない七百年前に於て既に斯る大作を遺し得た隆兼の手腕を驚嘆すると共に、今に於て尙新鮮味が橫溢してゐるその畫趣を賞讃せざるを得ない。洵に本卷は我が美術史上拱璧の價値ある逸品である。

秋山光夫記

長唄新曲『舟江の四季』

山田穀城作
稀音家六四郎作曲

新潟午後八時より

唄　しげ笛　ない
唄　千代菊　鼓　とし
三味線　たか　太鼓　つる
唄　力彌

〜旅まくら、かり寢の夢も、一と夜さは、契りをのこす新潟に、心ひかる〜名どころや、四季の眺めもとり〳〵に、梅が笑へば、うぐひすも、初音をあげてそは〳〵と、谷の戸出づる白山の、やしろ賑はふ春まつり、掛けつらねたる提灯の、火影に二人おれはゆきおもひを船にかへるさの、雨もしつぽり西廂に、濡き情の妹背ごと、戀しい首尾ぢやないかいな。

〜夏は待たる〜川開き、花火に更けてみじか夜を、惜むといふはきぬ〳〵の、別れを惜むいつはりか、さつと吹きこむ川風に、ほつれし鬢を掻き上ぐる、手に手をぬしのいたづらな、にらむ目元によろづ代と、名に負ふ櫻の影長き、味な緣ではないかいな。

〜秋ふく風の身にしめば、雲のあなたにゆき通ふ、風のたよりを待ちわびて、のぼりつめたる日和山、海原遠く漕ぐ船の、岸に寄るまで立ち暮らし、もしやと縋む女氣を、なぶるこゝろかゲ空におもはせぶりな雁の聲、憎らしいではないかいな。

〜菊も紅葉も時すぎて、冬の景色をみこし路の、雪に一ときは興まさる、浮世をよそに置炬燵、常盤ケ岡の千代かけて、宮居久しき神垣に、船江の里の繁昌を、祈る心も晴れ〳〵と、二人して踏む朝の雪、たのしい仲ぢやないかいな。

〜入りくる帆かげ賑つきぬ、賑はふ港ぞ久しけれ。

溪居清適圖　富岡鐵齋筆

此圖は鐵齋翁八十五歳の大正九年の作である幅一尺五寸位の紙本に岩繪具の彩色を施してある。正宗得三郎氏が所藏される。

風景　セザンヌ

この作の製作年代は不明であるが、中期の作ではないかと思はれる。

ノルマンデイの風景　ボナール

ボナールの一九二五年の作品です。

たんぼ　山本鼎

今年一月に東京市外砧村での制作、氏が好んで描かれるサムホール形スケッチ板である。

風景　中川一政

此の畫は昨年の六月、丹波下夜久野で描いたもので、大きさは約十五號大。中川氏は「この畫を描いてゐる時、見てゐた農夫に向ふの山は何といふかと聞いたら「いのゝ山」と云ふのだと答へた妙な名前だねと語つてゐた。

した

一、昭和五年決算報告の件
一、同年度事業報告の件
一、昭和七年度豫算（二千五百三十五圓）議定の件
一、同年度經費分賦方法の件
一、同年度項以下の流用を評議員會に一任の件
一、一時借入金の件
一、基本金並に支拂基金預入先變更の件（臨後銀行と百三十九銀行糸魚川支店に變更）
一、寄付金採納の件

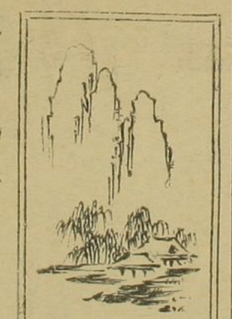
上組農學校　生徒募集

上組農學校では實習地約一町五反歩を有し農業教育の充實に努めて居るが、近年一般に各學校卒業生が就職難に苦み折柄にも拘らず隣郡各地からの入學志望、或は手續きを入學資格とする二年生入學は十五名と今回本縣より認可指令があり入學手續きは願書履歴書小學校長の調書を添へ三月末日まで同校へ提出するを要し入學檢定は小學校長調書考査と口頭試問、身体檢査のみにて一二學年共四月四日午前九時から同校にて施行すると

燕の賣上高　一萬五千餘圓

燕町協商會主催の聯合初賣出しは既報の如く第一日目の二日より三日は更に人出多く一段と賑つたが結局昨年に比し累計に於て二割を減じ一萬五千餘圓を算した二日午後より三日に於ける抽籤幸運者の重なるもの左の如し

一等　總桐大簞笥一本　苑池要久



群馬欄

各區孰れも

標原製

以下
10丁
白紙

山水圖　　橋本雅邦　　（作の才九十五、年六十二治明）　　（藏館物博室帝）